

【付録】

- ① 平成 27 年度 全学入学前教育プログラム実施報告
- ② 平成 28 年度 「自立と体験 1」 実施報告
- ③ 平成 28 年度 「自立と体験 3」 実施報告
- ④ 平成 28 年度 「自立と体験 4」 実施報告
- ⑤ 平成 28 年度 「キャリアデザイン 1」 報告書
- ⑥ 平成 28 年度 「キャリアデザイン 2」 報告書
- ⑦ 平成 28 年度 明星教育センター 自校史教育事業報告

明星大学
学長 大橋有弘 殿

平成27年7月9日

全学入学前教育担当
副学長 高島 秀樹
明星教育センター
センター長 原田久志

平成26年度（平成27年度入学対象）明星大学入学前教育の実施について（報告）

1. 全体総括

平成26年度（平成27年度入学対象）の入学前教育プログラムは、前年度より次の点を大きく変更して実施した。

- 1) 通信教育をeラーニング教材中心としたものへ変更し、費用の一部を受益者負担とした（1人10,000円負担）
 - 2) 「特別講座」の導入（本講座では初めて一般入試合格者も対象者に加えた）
- また、通信教育にeラーニング教材を導入したことによって、委託業者の変更を行った。それに伴い、事前準備、運営、他部署との調整等に時間を要したが、無事に新プログラムを終了することができた。実施したプログラムの詳細については以下の通りである。

2. 実施プログラムの概要

プログラム名	目的	対象	実施日	主な実施内容
スタートアップ講習	・年内合格者が入学までの期間を有効に使うためのサポートを行う			1)以下の4プログラムを実施 1)英語・国語(学内試験) 2)数的処理・理系数学は自宅受験とする 1)自己紹介・大学生生活準備チェック」などの4人グループ 2)通信教育ガイダンス 3)校歌練習 1)学科ごとに内容を検討し、各教室に分かれて実施。 1)大学の歴史、現状、教育理念、教育方針と、入学前プログラムについての説明・DVD上映 2)在学生スビーチ
① プレテスタ	・通信教育のレベル分けを行う	AO入試合格入学者	平成26年11月16日(日)、12月14日(日)、12月21日(日)	
② 大学生生活スタート講座	・入学前の準備を確認する ・通信教育実施への動機づけ	推薦入試合格入学者		
③ 学科交流会	・入学する学科の上級生や教員と接し、大学生生活のイメージをつくる			
④ 保護者ガイダンス	・入学予定者の保護者に明星大学を理解し、入学までの準備への協力を求める	上記の入学予定者の保護者		

通信教育	大学での学習に必要な基礎学力の獲得 ・学習習慣の獲得	上記の入学予定者	平成26年12月～平成27年2月	※国語・論作文以外は、eラーニングで実施。 【必修科目】 英語 数的処理・理系数学 国語・論作文(紙媒体) 【選択科目】学科ごと 物理・化学・力学 1)大学生活においてルールを守るこの意味を考えさせ、大学生活に広げるためのグループワーク(4人程度のグループ) 2)リメディアル教室での作文指導 1)入学前からリメディアル教室の利用ができる 2)通信教育の課題についての質問やさらさら勉強したい場合に活用するよう周知 1)大学の授業体験(全学共通教育の教員) 2)4人グループでのワークシヨップ。自己紹介・自分が受けた授業を他のメンバーに報告。それをもとに大学での学びについてグループで考える
フォローアップ講習	・入学後の学習に支障が出ないようにフォローする ・リメディアル教室を知る	通信教育の課題・修了テスト未実施科目が1つ以上あった入学予定者	平成27年3月10日(火)、3月11日(水)	
スクーリング	・通信教育をサポートする	スタートアップ講習参加者	平成27年2月～3月	
特別講座	・一般入試の入学予定者に対しても入学前教育の機会を提供する ・高校までの学びと大学での学びとの違いを理解する	一般合格者(前期・中期)年内入試合格者	平成27年3月19日(木)	

3. 実施結果

3-1. スタートアップ講習

スタートアップ講習の出席者は3日程で合計883名(対象者1018名、出席率86.7%) (前年度：対象者985名中出席者832名、出席率89.0%)であった。プレテスタにおけるアンケート集計(出席者883名中回答者777名)によると、入学予定者は英語について66.7%が「難しい」と回答したが、国語については54.8%が「易しい」と回答している。さらに97.8%の入学予定者が「自分の今の学力を確信できた」と回答している。また学科交流会におけるアンケート集計によると、「よかった」「ややよかった」という評価が96.3%であり、アンケートの自由記述の回答をみると、「どのような雰囲気や授業をするのか少し分かった」、「どんな先生がいるか、同じ学科にどんな人があるか知る事ができた」、「先輩達の経験を知り今後の自分のイメージができた」等、肯定的な意見が多かった。授業体験や在学生との関わりは、入学予定者にとって入学後の自分をイメージする良い機会になったのではないかとと思われる。

3-2. 通信教育

通信教育はeラーニングを取り入れて実施した。全体としての課題着手率(国語についてはeラー

だと言える。課題着手率は、教的処理・理系数学で際立って低く、全体の課題着手率を上げるためにはこの数字を上げていくことが有効であろう。教的処理・理系数学はプレテストを自宅受験としており、それにより生徒が自主的に課題に着手しにくい状況ができてしまっている可能性も考えられることから、プレテストの実施科目について再度検討する。

また、eラーニングでの学習の中で、課題未着手者にどのようなようなフォローを行っていくかという点についても、より有効な方法を検討していきたい。

4-2. 通信教育の成果の再検討

入学前教育プログラムの中で、通信教育は大きな位置を占めている。通信教育の2つの目的、大学の学習に必要な基礎学力の修得、学習習慣の獲得に関して成果が上げられているかを再検討する。

具体的には、課題の難易度と分量、学習期間等についての検討、フォローアップ講習の周知の時期や方法など参加者数を増やす仕組みの検討、スクーリングの利用率を上げるための周知の方法等の検討が考えられる。たとえばリメディアル教室に通う意義の周知やリメディアル教室の講師と協同での講座の実施なども有効と考えられる。また、フォローアップ講習に参加できなかった入学予定者に対して、課題に取り組ませる等の学習機会の提供も検討していきたい。

4-3. 特別講座の実施方法等の再検討

今年度より新たに導入した特別講座は、参加者の評価は高かったため、引き続き実施していくことが妥当だと考えられる。平成 27 年度（平成 28 年度入学予定者対象）については、対象・内容・進め方等、今年度と同様の方法で良いかを検討する必要がある。特に、他のプログラムとの関連を考えながら、入学前教育プログラム全体の学習機会を提供していきたい。

以上

【問い合わせ先】

明星教育センター事務室
 御厨、萩原、新村（内線：7086,7090,7087）
 電話：042-591-6534
 E-mail：mec@mec.meisei-u.ac.jp

ニングを使用しなかったため課題提出率は 89.3%であった。前年度の課題提出率 96.4%と比較すると 7.1 ポイントの低下となっている。今年度の科目別の課題着手率をみると、英語が 95.4%だったのに対し、教的処理は 88.8%に止まっている。英語と比較して教的処理の課題着手率が 10 ポイント以上低くなっており、前年度比ポイント低下の大きな要因と考えられる。スタートアップ講習で実施したプレテストの結果と、通信教育終了後に実施した修了テストの結果を比較すると、国語、英語、教的処理・理系数学のそれぞれ別の科目で、点数が伸びていた。なお、通信教育の総括については、委託業者による報告書（株式会社ワココーポレーション）を、学部支援室にて参照されたい。

3-3. フォローアップ講習

フォローアップ講習は、通信教育の科目（国語・論作文、英語、教的処理・理系数学）について、一科目でも課題及び修了テストが未実施であった入学予定者（171名）を対象に、大学生生活におけるルールを守ることをの意味を考える等を目的とし、3月10日・11日に実施した。参加者数は80名（前年度：対象者136名中参加者67名）だった。

3-4. スクーリング

大学生生活スタート講座において、入学前からリメディアル教室を活用できることを伝え、通信教育の課題に質問のある者やさらに学習したい者は、積極的に活用するように指導した。なお、スクーリングの参加者数は、延べ47名（前年度35名）であった。

3-5. 特別講座（テーマ：「大学で学ぶ」）

平成 26 年度（平成 27 年度入学対象）は、新たな取り組みとして、年内入試合格者だけでなく、これまで入学前教育の対象としてこなかった一般前期合格者及び一般中期合格者も含め対象者とした特別講座を3月19日（木）に実施した。結果371名（うち一般入試・センター利用入試合格者289名）が参加した。講座内容は大学での学びと高等学校までの学び（学習）との違いを理解することとし、全学共通教育の教員による授業を4クラス（歴史、哲学、英語、文学）に分け実施した【実施教員：小林一岳（歴史）、村井剛夫（哲学）、バーデン・タイラー（英語）、岡田恒雄（文学）、以上敬称略】。終了後、明星教育センターの教員によるワークショップを実施し、全学共通教育の教員による授業を受け、4つの授業の受講生がそれぞれ4名となるグループをつくり、自己紹介/昼食（グループごと）、自分が受けた授業についてシートを述べてまとめる、そのまとめシートを使って、自分の受けた授業をグループのメンバーに報告する、大学での学びについてグループで考える、について実施したアンケートの集計結果としては、97.6%の回答が、特別講座に対して「よかった」「ややよかった」と評価している。アンケートの集計結果については、学部支援室にて参照されたい。

4. 平成 27 年度（平成 28 年度入学予定者対象）実施に向けての課題と対応策

平成 26 年度（平成 27 年度入学対象）の実施結果から、次の3点の課題があげられる。

4-1. 通信教育の課題着手率の向上

通信教育の課題着手率（課題提出率）を上げることは、生徒の学習習慣付けという目的に沿ったもの

学部長281013-4

平成28年10月13日・学部長会資料
平成28(2016)年10月5日

学長 大橋 有弘 殿

平成28(2016)年度全学初年次教育「自立と体験1」実施報告書

「自立と体験1」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

【報告要旨】

- ・出席率は7年間で最も高い**86.7%**となった。
- ・初回と最終回の授業で実施した自己評価に関する無記名のアンケートでは、「卒業後にしたいこと（進路）を考えていますか?」「学生時代にすることを考えていますか?」「明星大学の歴史や教育の特色を知っていますか?」「大学の図書館の利用方法について知っていますか?」「自分の意見を筋道立てて話すことができますか?」「敬意・関心を持って他者の話を聞くことができますか?」「自分の意見を文章でわかりやすく表現できますか?」の7項目で「とてもそう思う」「そう思う」と回答する学生の合計が伸びを示した。
- ・「規律を守って学習活動ができますか?（無断欠席や遅刻をしない、など）」では、今年度も数値が下がった。
- ・授業の特長に関する質問では、「少人数クラス」「他学部・他学科の学生との交流」「グループでの学習活動」が役立つこととの問いには、「とてもそう思う」と「そう思う」という肯定的評価の合計がいずれも**90%**を上回った。
- ・「ポートフォリオ」が役立つととする肯定的評価の合計は**77.7%**、「提出課題」への肯定的回答の合計は**79.1%**であった。
- ・「ためになった授業」としては、**1,052**名の学生が「新しい環境で他者と出会う」(第2回)を挙げ、「自分や相手の大切さを知る」(第10回)、「これからの大学生活を描く」(第14回)が多かった。
- ・自由記述から次の感想類型が推測できる。「当初は不安や苦手意識もあったが、他学部学生との交流やグループワークのなかで自分を見つめ直す楽しい機会になった。コミュニケーションの大切さや技法を知り、友人も増え、将来のことも考えられた。自信と積極性をもって、今後の学生生活に臨むことができる。」
- ・**102**名の学生がSA/TAとして授業をサポートし、**9**名の学生がSAコーチとしてSAのサポートを行った。
- ・単位修得率は7年間で最も高い**93.9%**となった(補習授業後の単位修得を除く)。
- ・次年度に向けての主な改善点は、**15**回を通して出席し続ける意識付けと、SAの役割の強化である。

平成28年10月13日・学部長会資料
平成28(2016)年10月5日

学長 大橋 有弘 殿

平成28(2016)年度全学初年次教育「自立と体験1」実施報告書

「自立と体験1」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

1. はじめに

7年目の「自立と体験1」は、出席率、単位修得率ともに、これまでで最も高い結果となった。学生アンケートの結果も、学生の自己評価・授業内容の評価ともに例年通り高い数値であった。運営面に関しては、SA/TA、SAコーチの活躍も見られた。

そこで本報告書では、実施結果、アンケート結果とともに、SA/TAの運用に関しても取り上げて報告する。また、今年度実施した改善事項についても取り上げる。それらを通して、来年度に向けての方向性を示す。

2. 実施結果

(1) 出席率

今年度の出席率は、表1の通り、7年間で最も高い**86.7%**となった。平成22年度以降の各年度の出席率は、図1の通りである。

表1 「自立と体験1」各年度の出席率

	平成28年度	平成27年度	平成26年度	平成25年度	平成24年度	平成23年度	平成22年度
出席率	86.7%	85.0%	84.3%	84.0%	85.1%	84.9%	82.7%

「自立と体験1」出席率

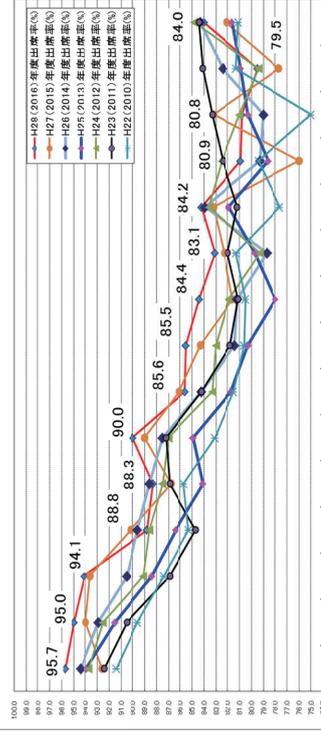


図1 7年間の各回における出席率

今年度の特徴としては、全体として、14回(79.5%)を除くと80%を割ることはなく、緩やかな漸減で推移した。明星大学4年間の最初の授業がこの「自立と体験1」となる学生が大半を占め、1回目から高い出席率を15回まで継続できた。特に、15回の授業のうち11回で過去最高を示している。多くの教員から寄せられた、「学生がまじめに取り組んでいる」の声に、その要因を考えることができる。

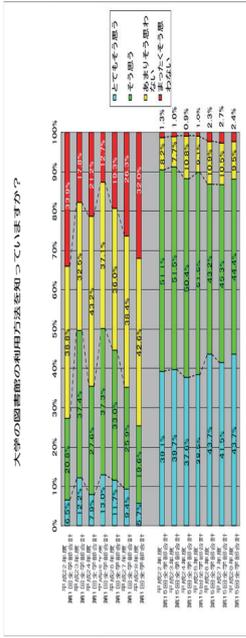


図5 大学の図書館の利用方法について知っていますか？

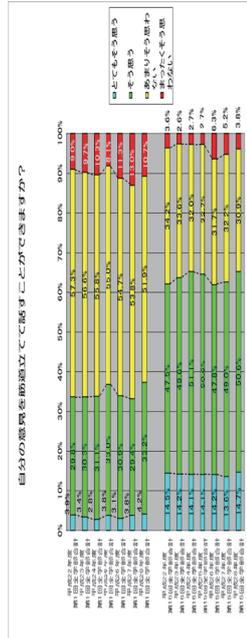


図6 自分の意見を筋立てて話すことができますか？

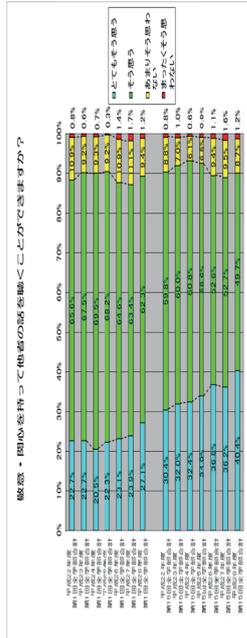


図7 敬愛・関心を持って他者の話を聴くことができますか？

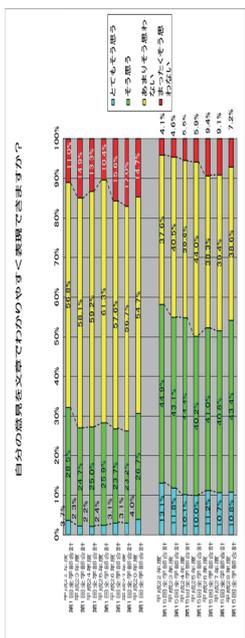


図8 自分の意見を文章でわかりやすく表現できますか？

(2) 学生の自己評価に関する質問

授業の学習効果を確認することを目的として、1回目と15回目の授業で、同一の質問項目で、8項目について無記名アンケートを実施している。「とても思う」「そう思う」「そう思う」「そう思う」の回答の割合を、それぞれ1回目と15回目で増減をくらべてみた。「卒業後にしたいことを考えている(72.7%→75.5%)」(図2)、「学生時代にすべきことを考えている(83.6%→86.7%)」(図3)、「敬意・関心を持って他者の話を聴くことができる(89.4%→90.1%)」(図4)、「自分の意見を筋立てて話すことができる(87.4%→85.3%)」(図5)、「自分の意見を文章でわかりやすく表現できる(80.7%→84.2%)」(図6)で、肯定的な回答をする学生が多い傾向は例年通りの結果となっている。中でも、「敬意・関心を持って聞く」と「とても思う」が伸びを示している。4回目と5回での「聴く」の内容が反映されていると考えられよう。「将来の目標や、そのために大学4年間で何をしたいべきか、具体化された」や「自分の意見を言うことの大切さ、人の意見を聴くことの大切さを学ぶことができた」等、自由記述にも示されている。また、「明星大学の歴史や教育の特色を知っている(85.4%→87.0%)」(図7)、「大学の図書館の利用方法を知っている(85.3%→88.1%)」(図8)でも、高い数字を示している。「これらレポート作成でも役に立ちそうである」の記述からも、学生にとって効果があったと読み取れる。ただし、「規律を守って学習活動ができる(91.2%→84.5%)」(図9)は、教値を下げた。出席率との関係を見ても学生の正直な一面を示している。

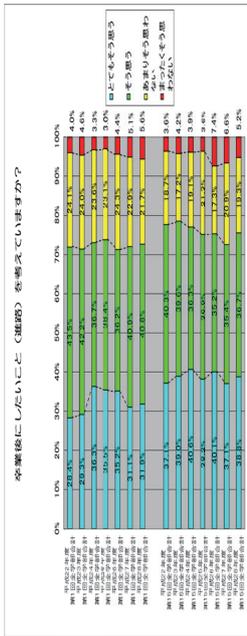


図2 卒業後にしたいこと(進路)を考えるといますか？

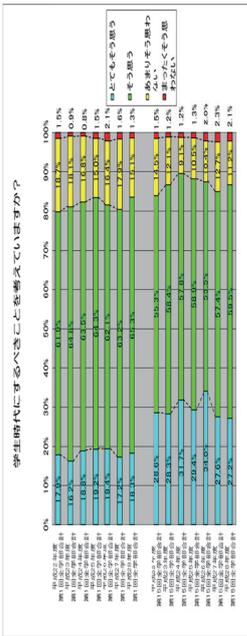


図3 学生時代にやるべきことを考えていますか？

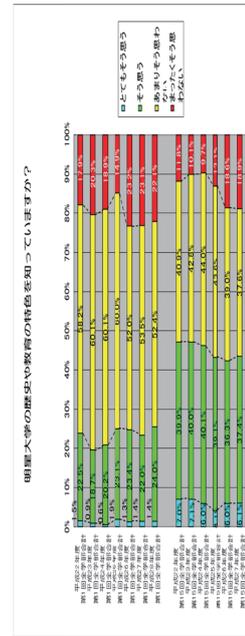


図4 明星大学の歴史や教育の特色を知っていますか？

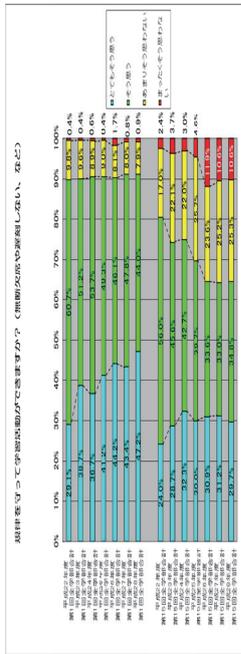


図9 規律を守って学習活動ができませんか？(無断欠席や遅刻をしない、など)

(3) 授業の特徴に関する質問

「自立と体験1」の授業の特徴に関する5項目で、学生の回答を考察する。『少人数クラス』は役に立ちましたか(90.7%) (図10)、『他学部・他学科の学生との交流』は役に立ちましたか(93.1%) (図11)、『グループでの学習活動』は役に立ちましたか(91.5%) (図12)、では、90%以上の例年通りの高い数字を示している。ただ、この3項目では、“とてもそう思う”がこの3年間で増加しているのも特筆すべきことである。「全学部が散らばって、様々な学部の人と出会い、様々な考えを聞くことができ、自分にとっては何れも新鮮で、自分に考えの幅が広がった」の学生の声がある。『ポートフォリオ』は役に立ちましたか(77.7%) (図13)、『課題提出に取り組みることにより学習の深まりましたか』(93.1%) (図14)と、この2項目についても80%近くの高い数字である。『ポートフォリオ』に今まで自分が考えたこと、これからどうしたいかを書いてあるから、これからは聞いた時や前が見えなくなつたとき、ポートフォリオを見直して参考にしたい等、この授業の特徴を理解し、将来に生かしていかうとすることが認められる。

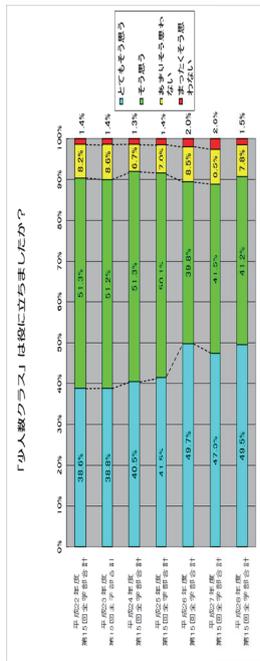


図10 「少人数クラス」は役に立ちましたか？

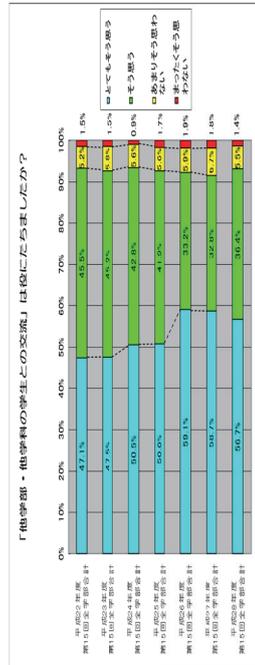


図11 「他学部・他学科の学生との交流」は役に立ちましたか？

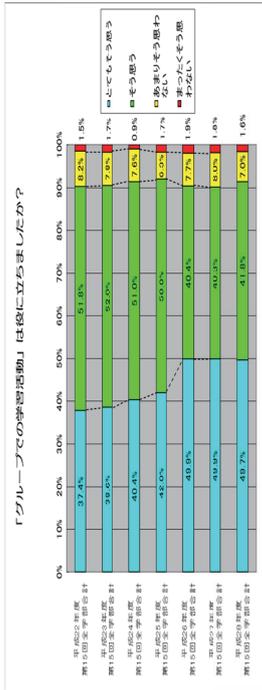


図12 「グループでの学習活動」は役に立ちましたか？

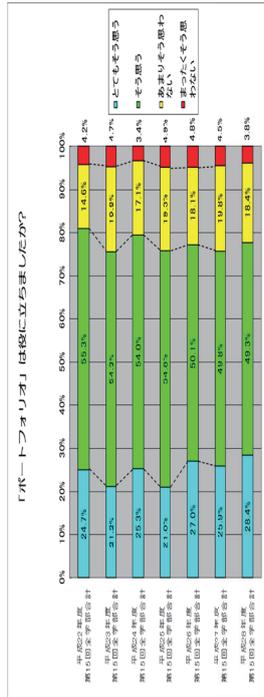


図13 「ポートフォリオ」は役に立ちましたか？

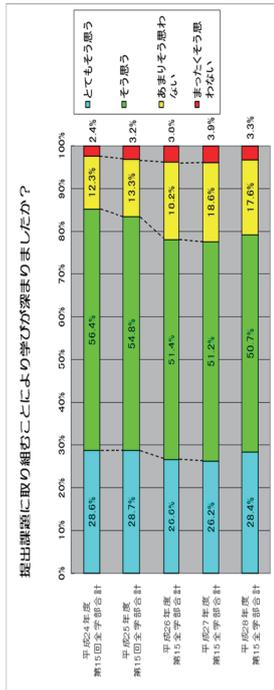


図14 提出課題に取り組みることにより学習の深まりましたか？
(※平成28年度から設問の表現をわかりやすく変更)

(4) 「ためになった授業」

15 回を通して、学生が「ためになった授業」内容を、その実施各回で調べている。学生が「ためになった」と回答している授業は、15 回総数で 9378 を教え、一人当たりの平均回答数は 5.0 である。中でも、2 回目の「新しい環境で他者と出会う」(10 回)も「ためになった」と「これからの大学生活を描く」(14 回)、「自分や相手の大切さを知る」(4 回)、「仕事と自分について考える」(13 回)も「ためになった」という。最初が不安でいっぱいだったけど、回を追うことに安定していったと、学生との交流から学んだことも多い。[今後の目標や、そのための大学生活 4 年間で何をしたいか、具体化されたと思う。この授業を通して考えたことと立てた目標を達成して、実りある大学生活を送る]の記述に具体的な学生の考えが表れている。

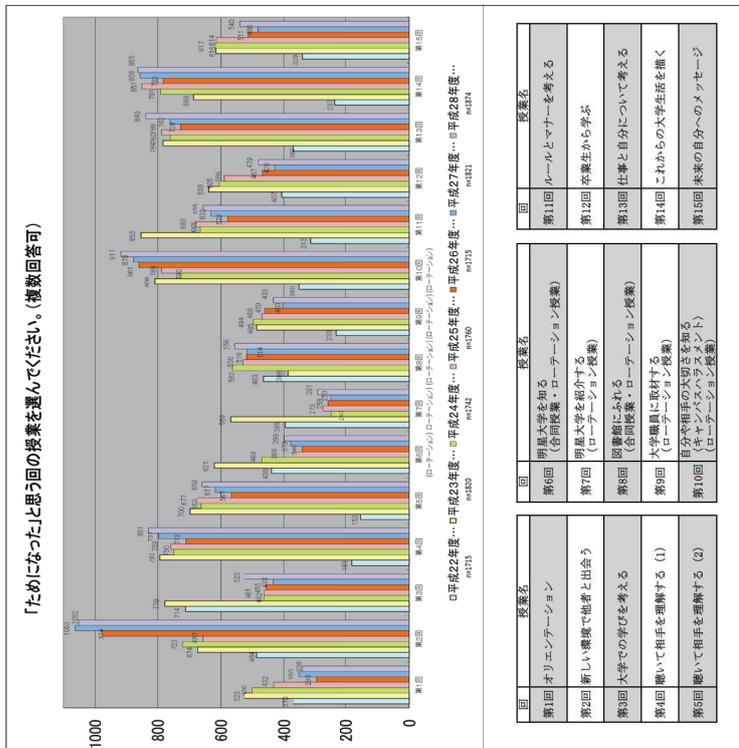


図 15 「ためになった授業」に関する回答の回答の経年比較

(6) 自由記述欄

アンケートの自由記述欄「この授業を修えての感想などを自由に書いてください」(回答率 80.1%) (回答率 80.1%) から、学生が「自立と体験 1」を通して何を学んでいるのかを知ることができる。自由記述に多く登場する言葉は、「自分・自己」(26.3%)、「楽しい・楽しかった」(25.5%)、「他学部・他学科」(18.6%)、「開わり・開つる」(14.7%)、「考えた・考え」(12.6%)であった。学生たちが、個々の授業内容より、それらが自分ことりどりのような経験であったかを重視したことが推測できる。

自由記述からは、次の感想類型が推測される。「当初は不安や苦手意識もあったが、他学部学生との交流やグループワークのなかで自分を見つめ直す楽しい機会になった。コミュニケーションの大切さや技法を知り、友人も増え、将来のことも考えられた。自信と積極性をもって、今後の学生生活に臨むことができる」(詳細は巻末別表参照)。

3. SA/TA・SA コーチの運用に関して

(1) SA/TA に関して

今年度は、開講 68 クラスについて 102 名の学生が SA/TA として授業のサポートを行った。授業にあたっては、前年度の反省(授業の際に、教員の意図と SA/TA のサポートがずれがちなケースがみられた)などを踏まえ、SA/TA 研修の内容を改定して実施(2016 年 1 月 27 日 12:55~14:55、2016 年 2 月 1 日 14:55~16:55)し、授業の主旨と SA/TA の役割(表 2)をしっかりと理解してもらい本年度の授業に臨んだ。

表 2 SA/TA の役割

① 授業担当教員との円滑な意思の疎通を図り授業のサポート役をこなす
➢ 授業資料等の準備
➢ 授業の進行中でのアシスタント
➢ 出欠席等の管理サポート
➢ 学生の授業内の様子の報告
② 1 年生にとって、ファシリテーターとしての役割が重要であることを理解する
➢ 1 年生がクラスに馴染めるように
➢ グループワークがスムーズに進むように
➢ 授業の体験の中から学べるように
➢ 「自立と体験 1」の授業を楽しめるように
③ 明星教育センターの授業運営スタッフであることを理解する
➢ (業務日誌を通じて)各クラスの様子の報告
➢ 授業担当教員への事務連絡

(2) SA コーチに関して

今年度 2 年目となった SA コーチに関しては、9 名の学生が SA コーチとして SA のサポートを行なった。SA コーチの活動については、前年度の反省(SA/TA の役割が多かった等、十分に機能しなかった)等)を踏まえ、4 月までに「自立と体験 1」チームの教職員を含めて、SA コーチの役割と活動に関して教員のミーティングを行い、活動の詳細について議論しながら活動を進めた。また 4 月以降は、SA コーチ連絡会を月に 1 回程度実施(2016 年 4 月 25 日、5 月 27 日、6 月 24 日、7 月 29 日)し、SA コーチとして活動していくうえででの問題点を確認し、教職員からのアドバイスなどを共有しながら活動を進めた。なお、SA コーチの活動に関しては、「社会人基礎力育成グランプリ 2016 関東地区予選大会」(2015 年 12 月 6 日、拓殖大学にて開催)で発表し、初出場ながら準優勝賞を受賞した。

4. 今年度の改善事項(昨年度の実施を踏まえて)

(1) 単位修得率の向上

平成 22(2010)年度以降の「自立と体験 1」の単位修得率は表 3 のとおりである(補習授業での単位修得を除く)。

開講年度	平成 28 年度	平成 27 年度	平成 26 年度	平成 25 年度	平成 24 年度	平成 23 年度	平成 22 年度
単位修得率(正規授業)	93.9%	92.1%	91.3%	91.5%	91.0%	88.5%	89.9%

今年度の単位修得率(補習対象学生を除く)は 93.9 パーセントとなり、過去 6 年間と比較して最も高くなった。その要因としては、次の四項目、①各クラスでの教員による学生への適切な対応、②明星教育センターを中心とする

全学的なフォロー、③SA 及び SA コーチによる学生サポート、④欠席学生への電話連絡の徹底、などの例年通りの取り組みをより丁寧に行い改善に努めたことが効果的に機能したと考えられる。前記した SA コーチの活動の充実等もプラスに働いたと思われる。なお、別の要因として、初日（授業開始日）の授業が「自立と体験 1」だったことも影響したかもしれない。

(2) 授業内容の改善

授業内容については、今年度、特に大きな変更は実施しなかった。新たな取り組みとしては、第 14 回「これからの大学生生活を描く」において、社会人基礎力（明星大学ベンチャー）をわかりやすく解説した冊子『ジリタイまなブック』を配付した。

5. 次年度に向けて

平成 28 年度は、昨年に引き継ぎ、出席率・単位修得率ともに、授業実施 7 年間で最も高い結果となった。授業担当教員、各部署の職員、SA の学生たちと、明星教育センターの教員・職員・勤労奨学生による、「教職学協働」により、より良い授業がつけられたと考えているためであると考えられる。改めて、各位に感謝申し上げます。次年度に向けて、さらに「自立と体験 1」の授業をより良くしていくための改善点を上げていきたい。

① 15 回を通して出席し続ける意識付け

出席率は高かったものの、各回の出席率を見ていくと、後半に向かって下がって下げており、特に第三節の第 12 回、第 13 回、第 14 回では 80%前後まで下がってしまっている。第三節は、今後の学生生活の計画を立てるといふ学生にとって有益な内容であり、出席した学生の授業評価は高いだけに、後半に向かって出席する学生が減少することは非筋に残念である。この対策として、これまで「第二節の魅力を伝える」「欠席することの影響を伝える」といった方法を行ってきたが、さらに今年度は学生向けのニューズレターを発行し、ある程度の効果を見ることはできた。

一方、学生の様子を見ていくと、前期の後半に向かって体調をくずしたり、他の授業のレポートや試験に追われて時間管理がうまく出来なくなったりする様子も見られた。

これまで取り組んでいなかった側面として、時間の使い方、計画の立て方等についての知識を学ぶ内容を授業内に取り入れるという方法も考えられる。

② SA の役割の強化

SA は担当教員にとって、無くてはならないもので、非筋に助けられているという声が多い。1 年生にとっても魅力的な存在で、そのため多くの SA 希望者が申し込んでいるようになり、今後何らかの選抜が必要になる可能性もある。研修の実施方法も含めて、SA のあるべき姿を検討していくことも必要だろう。その際、適度な画一化は固々の SA の良さや意欲をそぐ可能性もあるので、その点も考慮して考えていくことが必要だろう。

以上

報告書作成：明星教育センター

櫻本遼彦・太田昌宏・落合泰一・菅原良・鈴木浩子・高橋南海子・平塚大輔・南愛・百木英明

<別表>

第 15 回アンケート自由記述欄に登場する言葉と登場セル数 (N=1,874セル)

言葉	回数	頻度
自分 (485)	492	26.3%
自分 (485) (の、に)、自己 (7)	478	25.5%
楽し (かつた、い、んだ、しく、他)	349	18.6%
他学部 (288)、他学科 (47)、(他)、様々な) 学系 (14)	276	14.7%
関わ (り、る、つて、等) (256)、かわわ (り、る、つて、等) (20)	236	12.6%
考え (る機会、きをつけ、た他)	201	10.7%
交流	183	9.8%
意見 (の大切さ)	161	8.6%
コミュニケーション	140	7.5%
グループワーク	122	6.5%
友 (友達、友だち、友人)	104	5.5%
将来 (自分の)	94	5.0%
ため (89)・為 (5) にな (る、つた、り、他)	88	4.7%
大学生活 (86)、学生生活 (2)	64	3.4%
他者 (35)、他人 (29)	60	3.2%
能力 (54) (が上がった)、スキル (6) (アップ、足りた)	60	3.2%
苦手 (を発見、を克服)	54	2.9%
目標	54	2.9%
成長	50	2.7%
不安	44	2.3%
頑張 (ろう、り) (32)、がんば (ろう、り) (12)	44	2.3%
発表	40	2.1%
積極的 (ef. 積極的) (cf. 積極的) (1)	32	1.7%
(相手に) 伝え (26)・つたえ (1) (る、て、たい)	27	1.4%
人見知り (25)、人みしり (1) (の自分、が運つた)	26	1.4%
先輩 (22)・せんぱい (1) (在学生、同学科)	23	1.2%
協力	21	1.1%
ルール (10)、マナー (11)	21	1.1%
初対面	17	0.9%
発見	14	0.7%
書 (く、いて、等)	14	0.7%
発言	13	0.7%
自信 (が)ついた、を持つて)	9	0.5%
自己紹介	8	0.4%
図書館	7	0.4%
職員	4	0.2%
卒業生	4	0.2%
歴史 (大学の)	4	0.2%
ポスター	3	0.2%
議論	2	0.1%
多様性	2	0.1%

2016 年 9 月 22 日

1. 「自立と体験 1」受講生について

(1) 受講生人数 (4月1日現在)

年度	2012	2013	2014	2015	2016
平成 22 年度	2151	2021	2141	1988	2157
平成 23 年度					
平成 24 年度					
平成 25 年度					
平成 26 年度					
平成 27 年度					
平成 28 年度					2160

(2) 出席率

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
出席率	82.7%	84.9%	85.1%	84.5%	85.2%	85.5%	86.7%

(3) 「自立と体験 1」単位修得率

年度	単位修得率 (正期受験)	単位修得率 (補習を含む)
平成 22 (2010) 年	88.9%	93.9%
平成 23 (2011) 年	88.5%	91.4%
平成 24 (2012) 年	91.0%	94.0%
平成 25 (2013) 年	91.5%	93.5%
平成 26 (2014) 年	91.3%	93.6%
平成 27 (2015) 年	92.1%	93.4%
平成 28 (2016) 年	93.9%	-

※単位修得率 (正期受験) は15回の授業時点での修得率、単位修得率 (補習を含む) は、補習実施後の修得率。

※単位修得率4月1日現在の学生数で算出

(4) 「自立と体験 1」(前期)について

実施時期	9月～10月							
	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
科目数	9 コマ	8 コマ	73					
補習対象者	130 名	128 名	80 名	92 名	76 名	66 名	51 名	593
申込者 (申込者)	85 名	76 名 (88%)	73 名 (91%)	77 名 (84%)	62 名 (79%)	49 名 (74%)	-	347
合格者 (合格者)	83 名 (96%)	67 名 (88%)	64 名 (88%)	55 名 (73%)	44 名 (71%)	30 名 (61%)	-	304

※1 当日、参加 1 名含む

※2 1 名退席、1 名診断書提出のため、補習対象者から除かれたため、上記人数から除かれている。

(5) 4 年修得率 (留年・留修することなく 4 年で 4 年修得した率)

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
通過率	70.2%	64.5%	66.3%	65.3%	70.9%	72.6%	77.1%

(6) 3 年修得率 (留年・留修することなく 3 年で 3 年修得した率)

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
通過率	74.7%	74.8%	73.7%	78.5%	81.6%	85.0%	85.5%

2. 「自立と体験 1」担当教員について

(1) 「自立と体験 1」担当教員数

	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年
専任	45	46	45	45	43	43	41
非常勤	5	5	5	5	6	9	9
合計	50	51	50	50	49	52	50

(2) 平成 28 年度「自立と体験 1」担当教員(前期)研修会参加者

	対象者	参加者	3月3日(水)	3月16日(水)	講師数
シラバス・ポートフォリオ事前説明会	44 人	44 人	20 人	18 人	6 人
授業方法に関する説明会	23 人	新規 23 人 継続 1 人	12 人	9 人	3 人

(3) 「自立と体験 1」代講件数

実施年度	代講件数 (名・数)
平成 22 (2010) 年	23 件
平成 23 (2011) 年	31 件
平成 24 (2012) 年	23 件
平成 25 (2013) 年	15 件
平成 26 (2014) 年	20 件
平成 27 (2015) 年	15 件
平成 28 (2016) 年	12 件

(4) 「自立と体験 1」ランチャミーティング参加者人数

実施年度	参加者人数 (名・人)
平成 28 (2016) 年度	181

3. SA・SA コーチについて

(1) 「自立と体験 1」SA 人数、説明会参加者数、研修会実施日

実施年度	SA 人数	SA 説明会参加人数 (概算)
平成 22 (2010) 年度	40 名	-
平成 23 (2011) 年度	52 名	-
平成 24 (2012) 年度	51 名	-
平成 25 (2013) 年度	68 名	130 名
平成 26 (2014) 年度	83 名	140 名
平成 27 (2015) 年度	92 名	139 名
平成 28 (2016) 年度	102 名	167 名

※平成 25 年度より公募 (説明会) 開始。

(2) 平成 28 年度「自立と体験 1」SA 説明会実施日

実施日	参加人数
平成 28 (2016) 年 1 月 27 日 (水)	45 名
平成 28 (2016) 年 2 月 1 日 (月)	48 名
平成 28 (2016) 年 3 月 29 日 (火) 【追加】	6 名
平成 28 (2016) 年 5 月 30 日 (水) 【追加】	10 名
合計	109 名

平成28年10月13日・学部長会資料

(3) 「自立と体験1」SA コーチ

実施年度	SA コーチ人数 (2年生)	SA コーチ人数 (3年生)	合計
平成27(2015)年度	3名	2名	5名
平成28(2016)年度	3名	6名	9名

※SAコーチは平成27年度より導入

4. 学内協力部署・職員・学生について

(1) 「大学職員」に取材する

① 「大学職員」に取材する(平成22(2010)年度、平成23(2011)年度は、「大学の活動」に含める)

実施年度	部署数	協力部署
平成22(2010)年度	5	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター
平成23(2011)年度	7	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、明星教育センター
平成24(2012)年度	12	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、人事課、広報課、調達センター、進路研究センター、明星教育センター
平成25(2013)年度		教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、人事課、広報課、調達センター、進路研究センター、明星教育センター
平成26(2014)年度	13	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、総務課、人事課、広報課、調達センター、進路研究センター、通信教育部、明星教育センター
平成27(2015)年度		明星教育センター
平成28(2016)年度	14	教務企画課、学生サポートセンター、キャリアセンター、ボランティアセンター、国際教育センター、情報科学研究センター、調達センター、総務課、学長室広報課、人事課、進路研究センター、地産交流センター、通信教育部、明星教育センター

※上記以外で「図書館」に取材する(平成22(2010)年度、平成23(2011)年度は、「大学の活動」に含める)の回で、図書館に取材された回で、4週間にわたります。4週間にわたります。4週間にわたります。4週間にわたります。

②平成28(2016)年度「大学職員」に取材する(各部署対応人数(延べ人数))

部署名	教務企画課	学生サポートセンター	キャリアセンター	ボランティアセンター	国際教育センター	情報科学研究センター	調達センター
訪問グループ数	41	37	38	27	28	35	30
対応者(延べ)人数	21	18	11	8	8	6	6

部署名	総務課	学長室広報課	人事課	進路研究センター	明星教育センター	通信教育部	明星教育センター
訪問グループ数	27	18	33	29	5	4	26
対応者(延べ)人数	8	4	7	5	1	1	6

③平成28(2016)年度「大学職員」に取材する(協力部署への特別説明会参加者数)

開催日時	参加者
5月13日(金) 15:00~17:00	9
5月18日(水) 15:00~17:00	7
開催回次	1

(2) 平成28(2016)年度「明星大学を知る」DVD 出演団体に係る

実施年度	出演団体	制作協力
平成28(2016)年度	総務課、IRKSI、学務課、体育会本部、INSI、放送研究部	放送研究部、明星教育センター

(3) 平成28(2016)年度「自立と体験1」ゲストスピーカー

実施年度	人数	学部学科学年
平成28(2016)年度	3名	人文学部国際コミュニケーション学科3年1名、教育学部教育学科3年1名、人文学部心理学科2年1名

以上

授業実施報告書「自立と体験 3」(平成 28 年度後期)

「自立と体験 3」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

Summary (概要)

- 平成 28 年度は、授業内容の順序、割り当て時間、演習内容(第 1～2 回: 導入時)、教材(第 5～6 回: 問題解決事例)に一部改訂を加え、平成 27 年度と同じシラバス、教育内容で実施した。改訂した点については、担当した教員より概ね支持を得られた。
- 最終的な履修者は 188 名であった(全欠席者除く)。平均出席率は 77.0%、単位修得率 88.0%(156 名)であった。
- 終了アンケートによると、90%以上の学生が、行動目標・到達目標を達成したと考え、授業を通じた能力の伸長及び意識の変化を自覚し、授業に満足をしていった。しかし、自立と体験 4 を履修したい学生は過半数に満たなかった。
- 次年度への課題としては、文章作成スキルの学習の導入、社会人基礎力と授業内容との関連性の強化、問題解決演習の課題(事例)の再検討が挙げられた。

1. 授業概要

1.1 教育目標

- チームで様々な課題や演習に取り組みむことを通じて、
 - (1) 論理的に考え表現することを学ぶ。
 - (2) 問題を発見し解決することを学ぶ。
 - (3) 大学生活でも役に立つ「社会人基礎力」を伸ばす。
 - (4) 自分の持ち味を知り、将来のキャリアを考えるきっかけとする。

1.2 行動目標・到達目標

- (1) 自ら考えて行動し、主体的に学ぶ。
- (2) 問題や問題意識の持ち方を理解し、問題解決技法を身に付ける。
- (3) 社会に対する関心を高める。
- (4) 自分の思い、考えなどを適切に表現する。

1.3 授業内容

平成 28 年度は、平成 27 年度「自立と体験 3」の課題を受けて、「授業内容の順序、割り当て時間、演習内容、教材に一部改訂を加え、平成 27 年度と同じシラバス、教育内容で実施し、明星大学独自のキャリア教育の確立に近づけていく」ことを目指した(授業内容: 資料 2)。
主な改訂ポイントは以下のとおりである。

- (1) 初回授業で授業内容や授業形式の良さを知り、履修継続意欲を喚起することを目的に、第 1～2 回の授業構成を検討した。具体的には、問題解決技法を身につけることが自分の大学生活や将来のキャリアに役立つということ、学部学科横断授業の良さを体験的に理解できる演習(自己紹介ワーク、ディスカッションと発表演習)を行った。
- (2) 問題解決技法、問題解決演習(基礎)、問題解決演習(発展)の展開が時間的にタイトであるという課題の改善策として、プログラムの構成は変えずに、各回の学習活動の流れ、教材内容を整理し、理解の促進と、現実場面への適応のしやすさを促した。

2. 実施結果

2.1 設置クラス数

2 年生後期科目として 9 クラスを開講した。開講時間は月曜 5 限・火曜 5 限・水曜 5 限・木曜 3 限・金曜 5 限・土曜 5 限とし、木曜 3 限は複数クラスを設置した。
授業は明星教育センターの 8 名の教員が担当した。9 クラスのうち 1 クラスは 2 名の教員で共同担当した。1 クラスあたりの履修学生数は、15～30 名であった。

2.2 履修者数及び単位修得状況

開講に先立ち、授業内容告知のチラシを配布し、全学科に対して履修ガイドランスで授業内容の説明を行った。

前期履修登録時の履修者数は 246 名、最終的な履修者数は 188 名であった(全欠席者 10 名を除く)。最終的な履修者は、昨年(204 名)より 16 名減少した。単位済み替えのある学科は、デザイン学科(10 名)、国際コミュニケーション学科(7 名)、経済学科(118 名)であった。自由科目として履修した学生は 52 名であった。
単位修得率は 83.0%であった。履修者の所属学科及び単位修得状況の詳細は表 1 に示す。

表 1 平成 28 年度学科別履修者数及び単位修得状況

学部学科名	総計	合格者数	単位修得率
理工学部 総合理工学科 生命科学・化学系	2	2	100.0%
理工学部 総合理工学科 電気電子工学系	2	1	50.0%
理工学部 総合理工学科 建築学系	3	3	100.0%
理工学部 総合理工学科 環境・生態学系	4	3	75.0%
人文学部 国際コミュニケーション学科	7	7	100.0%
人文学部 日本文化学科	8	6	75.0%
人文学部 人間社会学科	3	3	100.0%
人文学部 福祉実践学科	2	1	50.0%
人文学部 心理学科	1	1	100.0%
経済学部 経済学科	118	107	90.7%
情報学部 情報学科	4	1	25.0%
教育学部 教育学科	3	3	100.0%
経営学部 経営学科	20	9	45.0%
デザイン学部 デザイン学科	10	8	80.0%
造形芸術学部 造形芸術学科	1	1	100.0%
総計	188	156	83.0%

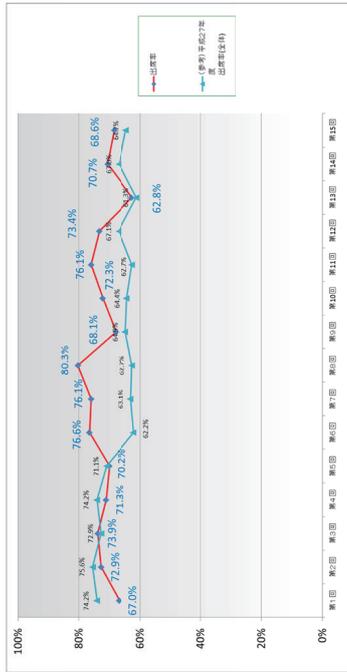
学部学科名	総計	合格者数	単位修得率
国コミ・経済・造形・デザイン(卒業要件として算入)	136	123	90.4%
その他の学科	52	33	63.5%

※全欠席の履修者を除く

2.3 出席率

平均出席率は 72.0%、最高は 80.3% (第 8 回)、最低は 62.8% (第 13 回) であった(全欠席者を除く)。初期(第 1～5 回)の出席率は昨年度(71.5～75.6%)と同程度であったが、第 5 回以降は昨年度を上回った。昨年度は第 5 回以降の出席率の低下が課題であったが、今年度は安定的な出席状況が維持された。出席率の詳細は図 1 のとおりである。

図 1 平成 28 年度 出席率



取り組み状況については、Q2「あなたはこの授業にどのように取り組まれましたか」において、非常に積極的に取り組めた」が 20%、「積極的に取り組めた」が 51%、「まあまあ取り組めた」が 28%、「出席した」があまり積極的に取り組まなかった」は 1%であり、概ね積極的に授業に参加していたことが伺える。

一方で、Q4「来年度の自立と体験 4 を履修するか」という問いに対しては、49%の学生が、「どちらともいえない」と回答している。昨年の 72%と比較すると、かなり低減したが、「履修したい」は 44%で過半数を割っている。理由として「他の授業との兼ね合いによる」、「役に立たないと思うが忙しくてその中で悩んでいる」等が挙げられており、次年度の生活が予測できない中で、さらに上位科目の履修は決めかねている様子が伺える。また、「卒業単位にならないから」という回答もあり、卒業単位に含まれないことが、学生の履修に影響を及ぼすことが示された。

3.4 教員から見た評価

担当教員からは以下の指摘があった。

(1) 平成 28 年度からの改善点について
 ・第 1～第 2 回において、問題解決技法を身につけることが自分の大学生生活や将来のキャリアに役立つことや、学部学科横断授業の良さを体験的に理解できる演習（自己紹介ワーク、ディスカッションと発表演習）に変更した点については、「進めやすかった」、「自体 3 の授業をイメージできた。グループ活動としてもうまく活用できた」という意見が多く示された。一方で、「ペーパーワークのようなチーム活動に焦点を当てて授業が無くなったことで、個別の問題解決にフォーカスするという流れができた」という意見も示された。

・問題解決技法 1・2（第 5～6 回）において、問題解決の事例自体が複雑で、所定時間内では消化しきれないという課題があったため、授業の組み立てで、ワークシート等に修正を加えた。事例とワークシートの整合性など、前年度より改善された部分はあったが、予定された活動をすべて行うには依然として時間調整が難しい側面もあった。「問題解決プロセスがなかなか理解できず、時間がかかった」、「もっとシンプルな例でも良いのではないか」、「サークル活動は、内容が身近なため、自分の価値観が入る」、「宿題（その後のタッチトラクビー）は活用できなかった」等の意見が示された。

・表現技法 3（社会の問題を考える）を第 7 回から第 10 回に移動したのは、授業の進行上都合がよかった。クラスの状態に合わせて柔軟な対応がなされていた。

(2) その他の授業に関する事項
 ・テクニカルスキル（文章作成、プレゼンテーション）を指導する機会が無かった。
 ・論理的思考（問題解決技法）を学ぶ動機付けが難しい。
 ・社会人基礎力との関連が弱い。授業のどこと結びつくか不明瞭。授業での扱いが少ない。
 ・ロジカルに考えることが一般化され過ぎている。専門の中で何を学んでいるかを考えさせさせるワークがあった方が良いのではないか。

(3) 学生の状況
 ・能力があるのに適当にすまして、単位取得を優先する学生（ラクタン）という意識の学生がいた。どのように対応するかが課題である。
 ・卒業単位にならないとわかつた時点で、やめる学生がいた。
 ・履修者が多い学科の中には、友達同士で同じ時間帯で履修している学生がいる。その中には、私語の多さや異質な他者との関わりが薄いという面を持つ学生もいる。

3. 授業評価

3.1 教育目標の達成

「行動目標・到達目標」に関し、終了時の授業アンケート（資料 1）において達成度を尋ねた。Q5「自ら考えて行動し、主体的に行動することができた」、Q6「問題や問題意識の持ち方方を理解し、問題解決技法を身につけた」、Q7「社会に関する関心を高めることができた」、Q8「自分の思い、考えなどを適切に表現することができた」のいずれにおいても、「とても思う」「そう思う」を合わせた肯定的な回答が 90%を超えており、多くの学生が本授業の行動目標・到達目標を達成したと考えられていることが示された。

3.2 能力の伸長及び意識の変化

「獲得した能力や意識」について、履修時に期待していたことがどの程度達成されたかを 4 件法で尋ねた。その結果、Q9「スキルが身につく」、Q10「意識や行動が変わる」、Q11「大学生生活や将来の役に立つ」のいずれの項目についても「達成された」、「やや達成された」の合計が 84%～91%の範囲にあり、概ね肯定的な回答を得られた。

スキルや意識の具体的な内容は、自由記述において「文章を書くスキル」、「考える力」、「意見を伝える」、「コミュニケーション」、「実行力」、「問題解決スキル」、「客観的に捉える」、「積極的に取り組む」、「人と関わる」、「先のことを考えて行動する」、「将来を視野に入れる」等が挙げられた。

3.3 学生の反応

授業に対する満足度について、終了時の授業アンケートにおいて 4 件法で尋ねた。Q1「あなたはこの授業に出席してどのように思いましたか」に対して「良かった」、「やや良かった」を合わせた回答が 98%、Q3「あなたはこの授業を後輩にも勧めますか」に対する「大いに勧めたい」、「勧めたい」の合計が 96%であり、学生の受講後の授業評価はかなり高いものであった。その理由として自由記述より「グループワークが多くて身に付けるスキルが多かった」、「違う学部の人と関わりを持つことができた」、「自分の積極性が試される機会であり、それが出てよかった」、「社会に出た時に役に立つ問題解決力を伸ばすことができた」、「就職活動や社会に出るときにの準備になった」、「将来のことを考える機会になった」等の理由が挙げられる。

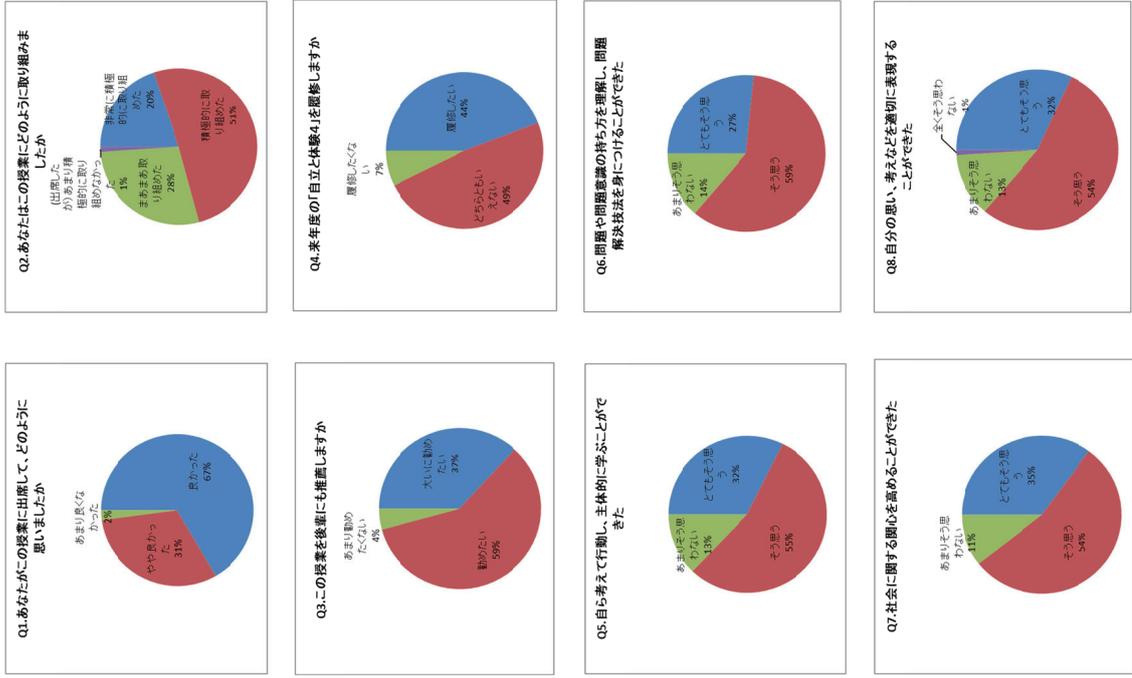
なお、否定的な回答として、「この授業は卒業単位にならないため勧めにくい」という指摘があった。

4. 次年度に向けての課題

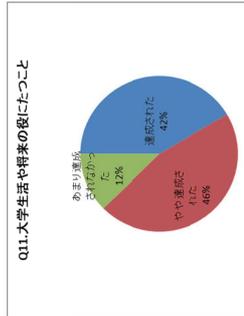
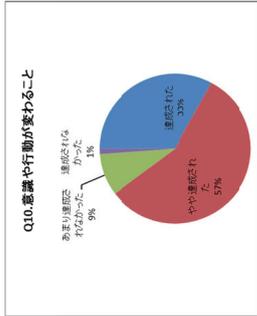
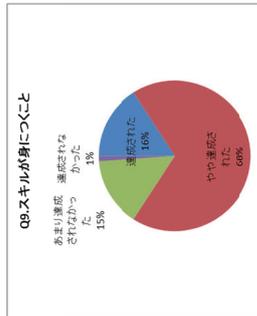
- (1) 文章作成スキルの学習の導入の検討
 文章の作成については、毎回の授業で 200 字の振り返りを書くという宿題と、1 回のレポート課題を課しているが、全体的に論理的な文章を書く力が弱い。本授業の時間内では、文章作成法について学習する時間や書かれた文章について十分なフィードバックをする時間をとっていないことも影響していると考えられる。そこで、次年度の課題としては、論理的な文章の作成方法について学ぶプログラムの導入を検討する。
- (2) 社会人基礎力（明星大学バージョン）と授業内容との関連性の強化
 本授業では、授業の開始時、終了時に社会人基礎力を測定し、この結果に基づいた目標設定を行うが、授業における学習活動と社会人基礎力との結びつきが不明瞭であること、授業内での取扱いが少ないため、意識されにくく、社会人基礎力があまり活用されていないという課題がある。そこで、次年度は、社会人基礎力と授業内容との関連性の強化について検討する。
- (3) 問題解決技法 1・2 の教材の検討
 問題解決技法の教材については、平成 28 年度においても、内容の検討を行ったが、まだ問題解決プロセスの理解と活用を促すには、事例のボリュームや難易度という点で課題がある。そこで、次年度は、問題解決技法（第 5・6 回）の事例の扱い方を中心に検討する。

以上

資料 1 授業終了時アンケートの集計結果



平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料



資料 2 平成 28 年度 自立と体験 3 授業内容一覧

回	授業名	授業のねらい	主な授業内容
1	オリエンテーション 授業全体の概要	・「自立と体験3」に興味を持つ ・授業で身につく力を理解する	1. 授業のねらいと内容の紹介 2. 自立と体験3の特徴に触れる ・自己紹介ワーク 3. 自立と体験3の特徴を知る 4. 振り返り、アンケート
2	チーム活動技法 チームで話し合いを 表す	・チームで協力して活動する体験 をする ・チームで話し合い、発表をまとめ るポイントを理解する ・チーム活動に必要なポイントを理 解する	1. ウォーミングアップ 2. 本学生生活を振り返る演習 3. ディスカッションと発表演習 4. チーム活動の振り返り 5. 振り返り
3	表現技法1 自分の意見を述べる	・自分の意見を論理的に述べる ・相手の意見を整理して聞く ・他者の意見を聞いて意見を述べる	1. ウォーミングアップ 2. 個人目標設定 3. 論理的に話す 4. 意見を述べる 5. 振り返り
4	表現技法2 話し合っって結論を出 す	・他者と異なる意見を述べることに 慣れる ・お互いの意見をもとに合意形成 を行う	1. ウォーミングアップ 2. 話し合っって結論を出す 3. プレゼンテーションの基本 4. 振り返り
5	問題解決技法1 問題解決を体験する	・問題や問題意識の持ち方を理解 する ・問題解決を体験する	1. ウォーミングアップ 2. 問題の場と問題意識の持ち方 3. 問題解決体験(ケース「タッチラグビークラス」 部分製問題) 4. 振り返り

平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料

6	問題解決技法2 問題解決のプロセス を学ぶ	・問題解決のプロセスを理解する ・問題解決の手法を使ってみる	1. ウォーミングアップ 2. 問題解決のプロセス(講義) 3. 問題解決プロセス実践(GW) 4. チーム活動の振り返り(チェックリスト使用) 5. 振り返り
7	問題解決演習 <基礎>1 現状の理解・原因の 特定	・問題解決の基礎を、演習を通して 学ぶ ・個人・プレゼンテーション ・個人1人1分間のプレゼンテーションの実践 3. 問題の認識・現状の理解・原因の特定 4. 振り返り	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
8	問題解決演習 <基礎>2 解決策の構想	・問題解決の基礎を、演習を通して 学ぶ	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
9	問題解決演習 <基礎>3 問題解決演習<基礎 >の振り返り	・問題解決の基礎を、演習を通して 学ぶ	1. ウォーミングアップ 2. 個人プレゼンテーション 3. 問題解決演習基礎の振り返り 4. 問題解決演習発展の準備 5. 振り返り
10	表現技法3 社会的な問題を話し 合う	・見方を変えて議論を深める体験 をする ・社会的な問題について意見を述べる ・社会的な問題を話し合う	1. ウォーミングアップ 2. 個人プレゼンテーション 3. 社会的な問題について意見を述べる 4. 議論を深める体験をする 5. 振り返り
11	問題解決演習 <発展>1 現状の理解・原因の 特定	・問題解決技法を活用してみる ・自分たちで主体的に授業に取り 組む	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
12	問題解決演習 <発展>2 解決策の構想	・問題解決技法を活用してみる ・自分たちで主体的に授業に取り 組む	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
13	問題解決演習 <発展>3 解決策のプレゼンテ ーション	・問題解決技法を活用してみる ・自分たちで主体的に授業に取り 組む	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
14	問題解決演習 <発展>4 解決策のプレゼンテ ーション 問題解決演習<発展 >の振り返り	・問題解決技法を活用してみる ・自分たちで主体的に授業に取り 組む ・チームの中で自分の振り返り	1. ウォーミングアップ 2. 個人問題の解決する 自分の問題 3. 課題の設定・解決策の構想・解決策の分析・行 動計画の策定 4. 振り返り
15	キャリアデザイン 自分の持ち味を探る 今後の行動を考える	・キャリアデザインの考え方を 知る ・自分の持ち味を知る ・今後の行動計画をたてる	1. ウォーミングアップ 2. 授業全体を振り返る (社会人基礎力チェック・振り返りシート作成) 3. 今後の行動計画をたてる (3年次の抱負、今後の行動計画)

以上

平成 28 年 10 月 5 日

学長 大橋 有弘 殿

平成 28 年度「自立と体験 4」実施報告書

「自立と体験 1」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

【報告要旨】

- ・3年生前期科目として計7クラスを開設した。
- ・経済学科、デザイン学科では、学科科目への読み替え措置が講じられた。
- ・履修者数は113名であった（昨年度は187名）。
- ・単位修得率は83.9%であった（昨年度は80.3%）。
- ・出席率は79.4%であった（昨年度は75.9%）。
- ・アンケートに回答した学生のすべてが授業に参加して良かった、やや良かったと肯定的に回答した。
- ・自由記述欄には、他学部との交流に対する肯定的な意見に加え、この授業によって自己理解が深まり、就職に向けて考えるきっかけになったと多くの学生が回答している。
- ・卒業後の進路についてイメージできていないと回答した学生は43%であり、半分以上の学生は卒業後の進路についてイメージできていなかった。
- ・次年度に向けての主な改善点は、クラスによる履修者数のばらつきを抑えて平準化を図ることと、仕事や将来についてより自分に引き寄せて考える力が十分に獲得できるよう、プログラムのさらなる充実を図ることである。

平成 28 年 10 月 5 日

学長 大橋 有弘 殿

平成 28 年度「自立と体験 4」実施報告書

「自立と体験 1」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

1. 授業概要

1.1 教育目標

- (1) 自己実現を目指し、職業を持つ社会人として自立できる能力と意欲を育てること。
- (2) 生涯を通じての継続的な学習意欲と就業力を育てること。
- (3) キャリア教育の最終手段として、具体的に自らの将来像、仕事、就職について考える力と意欲を身につけること。

1.2 行動目標・到達目標

- (1) 自らの課題を設定し、主体的に学ぶこと。
- (2) 就職活動の前提となる意識とスキルを身につけること。
- (3) 社会人の考え方に触れ、働くイメージや就業観を身につけること。
- (4) グループでの話し合いを通じて、自己を見つめ自己表現力を鍛えること。

1.3 授業内容

平成 28 年度は、平成 27 年度の課題を受けて、全体のプログラム構成は大きく変えずに、順序、授業内容、教材に一部修正を加え授業改善を行った。主な改訂ポイントは以下のとおりである。（全15回の授業内容は、資料1を参照）

- (1) 「自立と体験 4」を学ぶ上で前提となる“働く意識”や“働く先となる場（会社や組織）”について理解が深まる授業内容を導入時に実施。
- (2) 学生の主体的な学びを促進するためにジョブインタビューの計画（依頼者探し、実施計画）段階に十分な時間を確保し、実施内容を充実させる取り組み。
- (3) 「仕事理解を深める取り組み」として、PC を活用した企業や仕事に関する情報検索や相互に学び合うジグソー法を取り入れた情報収集演習の実施。
- (4) 「授業に最後まで出席する意識を高める」工夫として、ジョブインタビュー発表時期の後ろ倒しと振り返り内容の充実。

2. 実施結果

2.1 開講曜日・時間

3年生前期科目として、計7クラスを開設した。7クラスのうち2クラスは2名の教員で共同担当した。経済学科、デザイン学科の2学科が学科科目に読み替えの措置を行った。授業の開講曜日時間は表1の通りである。

【表 1】開講曜日時限

開講曜日時限	教員数	人数	開講曜日時限	教員数	人数
月曜日 3 限 (2)	各 1 名	63	木曜日 3 限 (1)	2 名	6
月曜日 5 限 (1)	1 名	7	金曜日 3 限 (1)	2 名	14
火曜日 3 限 (1)	1 名	18	金曜日 5 限 (1)	1 名	5
全体 (7 クラス)					113

() はクラス数

2.2 履修者数及び単位修得状況

平成 28 年度の履修者数は、113 名であった。昨年度の 187 名と比べて減少した。学部学科別の履修者数は表 2 の通りである。

単位修得者は、94 名で単位修得率は 83.9% だった。昨年度の 80.3% と比べて 3.6 ポイント上がった。

【表 2】学部学科別履修者数と単位修得者数

学部学科名	平成 28 年		平成 27 年		平成 28 年		平成 27 年	
	履修者	単位修得者	履修者	単位修得者	履修者	単位修得者	履修者	単位修得者
経済学部経済学科	74	61	47	40	4	4	7	4
造形学部造形学科	-	-	30	31	7	5	12	11
デザイン学部デザイン学科	9	8	0	0	0	0	0	0
情報学部情報学科	1	1	10	6	3	3	4	4
人文学部国際コミュニケーション学科	6	5	26	21	0	0	1	1
人文学部人間社会学科	1	1	8	6	0	0	5	4
人文学部日本文化学科	0	0	5	4	3	3	10	9
人文学部福祉実践学科	0	0	1	1	5	3	5	3
総計					113	94	187	147

* 履修登録者 113 名のうち授業に 1 度も出席していない学生が 1 名いた。単位修得率と出席率は履修者 113 名からその 1 名を除いた 112 名で計算している。

2.3 出席率

平成 28 年度の出席率の平均は 79.4% だった。昨年度の 75.9% と比較すると 3.5 ポイント上がった。最も高かったのは、第 1 回目の 89.7%、最も低かったのは第 15 回目の 61.6% であった。授業回毎の出席率は表 3 の通りである。

【表 3】出席率

授業回数	平成 27 年度		平成 28 年度		平均
	出席率(全体)	出席率(全体)	出席率(全体)	出席率(全体)	
第 1 回	89.7	83.1	79.2	77.0	74.9
第 2 回	86.1	87.4	77.9	81.4	75.4
第 3 回	88.8	79.8	83.2	77.0	72.1
第 4 回	74.3	79.8	77.9	78.2	66.7
第 5 回	78.8	76.0	83.2	61.6	57.9
総計					75.9

3. 授業評価

3.1 授業アンケート

(1) 授業評価

アンケートに回答したすべての学生が、授業へ参加して良かった、やや良かったと肯定的に回答した。自由記述欄には、他学部との交流に対する肯定的な意見に加え、この授業によって自己理解が深まり、就職に向けて考えるきっかけとなったと多くの学生が回答している。具体的には、「他学部との交流があるから（良かった）」「自分の過去や経験を将来に繋げて考えることができた」「就職に向けてこれから自分が何をすべきか知れたい」「将来のことに向き合えるようになった」という記述があった。

学生の授業への取り組み（積極性）については、78% が積極的に取り組めたと回答している。また、この授業から出た理由として就職に対する意識が高まったかについては、97% が高まったと答え、その理由として就職に対する意識が高まったことやジョブインタビューの体験を挙げている学生が多くみられた。授業評価については、すべての項目において昨年度と比べて高い結果となっている。

(2) キャリア意識、仕事・職業意識

生き方を考えるきっかけとなったと肯定的に回答した学生は 92% (昨年 90%)、様々な仕事について理解が深まったと回答した学生は 89% (昨年 81%) であった。自身の仕事・職業意識については、自分が社会に出て働き、貢献するイメージについては 77% (昨年 85%) の学生がイメージを持ってたと回答し、社会に出て働くことに楽しさを見つけていることができたかについては、78% (昨年 81%) がそう思うと回答している。また、自分にとつてのやりがいや働く意義がはつきりしたかについては、81% (昨年 88%) の学生がそうだと回答している。この結果から授業を通して、生き方を考えるきっかけとなったが、仕事・職業意識を深め、自分自身に引き寄せて仕事や将来について考える力が十分に獲得できたという実感が少なかったことが伺える。

(3) 獲得したい意識と能力

自分で考え行動し、判断することの大切さについて、肯定的に答えた学生が 96% であった。この授業を通して伸びたと思うスキルについての質問（複数回答）では、聴く力 (17%)、プレゼン力 (14%)、チーム活動 (14%)、情報収集の仕方 (13%) が高かった。

(4) その他

卒業後の進路は、イメージできていないと回答した学生が 43% と、半分以上の学生が卒業後の進路についてイメージできていなかった。具体的な進路はイメージできていないもののこの夏休みに就職活動のために取り組みたいこととして 79% の学生がインターンシップに参加したいと回答している。また、インターンシップ以外でこの夏休みに取り組みたいこととして、筆記試験や SPI、資格取得のための勉強などがあがっていた。

受講のきっかけについて（複数回答）は、自立と体験 3 を受講したからと回答した学生が 29% と最も高く、次に就職活動に不安があったと回答した学生が 24%、自分の可能性を伸ばしたかったと回答した学生が 19% であった。

3.2 教員からの評価

担当した教員から運営面や授業内容について以下の指摘があった。

- (1) 授業内容について
 - ・第 2 回「働く自分をイメージする」の回では、「仕事」や「社会の繋がりに」について学生の視点が広がりが理解が進んだ部分が見られた。その視点を後半の授業やジョブインタビューとも関連付けができると更に理解が深まるのではないかと。
 - ・第 8 回、9 回の「仕事理解（チーム・個人）」の回では、学生自身が多様な情報源を使いながら、積極的に取り組むことができ、その後のジョブインタビュー先やインターン先の情報収集に個人で取り組むなどの効果が見られた。但し、所定の時間内に学生が十分に情報収集に取り組むことは難しかった。
 - ・ジョブインタビューの取り組みについては、今年度は、依頼者探しや実施計画に時間をかけたことにより身近な人へのインタビューではなく、自分の興味のある仕事や業界についてインタビューをする学生が多かった。中でも飛び込みや電話等でアポイントを取るなど積極的に挑戦する学生も見られた。自分で計画し、アポイントを取り、インタビューをし、プレゼンをするという一連の流れを通して主体的に取り組む意識が醸成されていた。
- (2) 運営面について
 - ・クラスにより履修者数のばらつきがあった点について、少数数クラス（5～7 名）では、課題に丁寧に丁寧に向き合うことができ充実した内容ができた反面、多様性に欠け、学生相互の刺激が少くない面が見られた。大人数クラス（29～34 名）では、多様な意見が出て、学生同士のやりとりが多くできた反面、教員側の個々の学生の把握やアドバイスが難しい側面もあった。
 - ・教員 2 名体制のクラスについては、授業中に学生一人ひとりの興味・関心や進路の方向性などをそれぞれの教員が個別にヒアリングし、アドバイスしながら進めることができ、丁寧に丁寧に問われた点が良かった。

4. 次年度に向けて

- (1) クラス編成の平準化について

クラス人数のばらつきが授業に与えた影響については前述の通りである。来年度に向けては、個々の学生への関わりを充実させるためにも大人数クラスは、教員の複数体制も検討したい。また、10 名以下の少数数クラスについては、協同学習の効果が十分に出不ないことも考えられるため、その点をシラバスにも明記し、履修確定までの間

に学生に可能な限りクラス移動を促すなどクラス人数の平準化を図りたい。

また、今回少数人数クラスができたのは全体の履修登録者が少なかったことも影響している。そのため、全体の履修登録者を増やす取り組みについても今後何ができるか検討していきたい。

- (2) 社会における仕事と自分自身が働くこととの結節点を持たせる取り組みについて

今回、ジョブインタビュー演習を強化したことによって、様々な仕事への理解、社会人の職業観について考える機会が多く、学生の理解が進んだ面があった。その反面、自分自身に引き寄せて仕事や将来について考える力が十分に獲得できたという実感が少なかった点がアンケート結果から見られた。前半の授業で行った自己理解と後半のジョブインタビューでの学びが上手く関連付けられていないことが要因として考えられる。

次年度は、全体の授業構成のバランスを再考し、学生自身が将来に向けてどのようにな歩を歩んでいきたいのか、上記で述べた自己と社会と仕事をそれぞれ結節させるようなプログラムでの改善に向けて、検討したい。

以上

報告書作成：明星教育センター

榎本達彦・太田昌宏・落合一泰・菅原良・鈴木浩子
高橋南海子・平塚大輔・南愛・百木英明

平成28年10月13日・学部長会資料

【資料1】

1. 平成28年度「自立と体験4」授業内容

回	授業名	内容
1	オリエンテーション	授業全体の概要・取り組み方
2	働く自分をイメージする	会社や組織について理解する 自分が働くことについて考える
3	チームで働く	組織で働くことを考える チーム活動を体験する
4	自己理解1	体験を分析する方法を学ぶ 自分の経験を振り返る
5	自己理解2	モチベーションについて考える 自分の価値観を知る
6	ジョブインタビュー1	ジョブインタビューの準備をする 質問力をつける
7	自己理解3	ジョブインタビューの手順を考える 自分の強みを理解する
8	仕事理解1 (チーム)	情報収集の仕方を知る
9	仕事理解2 (個人)	社会人の考え方を知る 企業や仕事について理解する 様々な働き方を理解する
10	ジョブインタビュー2	プレゼンテーションの準備
11	ジョブインタビュー3	様々な人の仕事観を探る プレゼンテーションを体験する
12	ジョブインタビュー4	自分の体験を振り返る
13	グループディスカッション1	グループディスカッションの流れを知る グループディスカッションを体験する
14	グループディスカッション2	グループディスカッションを実践する 面接試験の基本を理解する
15	総まとめ	今後の方向性を考える

平成28年10月13日・学部長会資料

【資料2】

2. 平成28年度「自立と体験4」アンケート結果 (対象者92名)

1) 授業評価

<ul style="list-style-type: none"> • あなたはこの授業に出席して、どのように思いましたか？ 良かった (88%)、やや良かった (12%)、あまり良くなかった (0%)、良くなかった (0%) • あなたは授業にどのように取り組まれましたか？ 非常に積極的に取り組めた (26%)、積極的に取り組めた (52%)、まあまあ取り組めた (22%) あまり積極的に取り組めなかった (0%) • この授業に出席して就職に対する意欲は高まりましたか？ 多いに高まった (41%)、高まった (56%)、あまり高まらなかった (3%)、全く高まらなかった (0%) • この授業を後輩にも推薦しますか？ 大いに勧めたい (42%)、勧めたい (57%)、あまり勧めたくない (0%)、勧めたくない (1%)

2) キャリア意識、仕事・職業意識

<ul style="list-style-type: none"> • 授業を通して自分の生き方を考えるきっかけができた。 とてもそう思う (37%)、そう思う (55%)、あまりそう思わない (7%)、全くそう思わない (1%) • 自分が社会に出て働き、貢献するイメージが持てた。 とてもそう思う (19%)、そう思う (58%)、あまりそう思わない (22%)、全くそう思わない (1%) • 社会に出て働くことの中に楽しさを見つけたことができた。 とてもそう思う (25%)、そう思う (53%)、あまりそう思わない (22%)、全くそう思わない (0%) • 様々な仕事について理解が深まった。 とてもそう思う (38%)、そう思う (50%)、あまりそう思わない (11%)、全くそう思わない (0%) • 自分にあつた職業を探したいと思うようになった。 とてもそう思う (55%)、そう思う (35%)、あまりそう思わない (9%)、全くそう思わない (1%) • 自分にとってのやりがいや働く意欲がはきりした。 とてもそう思う (31%)、そう思う (50%)、あまりそう思わない (19%)、全くそう思わない (0%)

3) 獲得したい意識と能力

<ul style="list-style-type: none"> • 自分で考えて行動し、判断することの大切さが理解できた。 とてもそう思う (54%)、そう思う (42%)、あまりそう思わない (3%)、全くそう思わない (1%) • 自分自身について新たな発見があった。 とてもそう思う (44%)、そう思う (42%)、あまりそう思わない (14%)、全くそう思わない (0%) • 伸びたと思うスキルについて教えてください。(複数選択可) 1. 聴く力 17% 2. 論理的に話す力 11% 3. 文章表現力 8% 4. プレゼン力 14% 5. インタビューの仕方 11% 6. チーム活動力 14% 7. 討議する力 9% 8. 情報収集の仕方 13% 9. その他 (振り返る力、計画力、面接力) 3%

平成 28 年 10 月 13 日・学部長会資料

4) その他

- ・卒業後の進路について教えてください。
具体的にイメージできている (43%)、またイメージできていない(67%)
- ・この夏休みにインターンシップは参加する予定ですか。
必ず参加しようと思う(67%)、できれば参加したいと思う(22%)、する予定はない(21%)
- ・この夏休みインターンシップ以外で就職活動のために計画していることはありますか。
ある(26%)、考え中(58%)、ない(16%)
- ・「自立と体験 4」の授業を受講しようと思っただけや理由を教えてください。(複数選択可)
 - 1.自立と体験を受講したので 29%
 - 2.自分の可能性を試したかったから 19%
 - 3.就職活動に不安があったから 24%
 - 4.チラシを見て 4%
 - 5.自分の学部学科の先生・先輩から勧められて 2%
 - 6.ガイダンスに参加して 6%
 - 7.卒業単位になるから 12%
 - 8.その他 4% (面白そうだから、楽しそうだから、友人に誘われて、月 5 限を埋めたかったから、自体 1 の先生の授業をもう一度受けたかったから)

学部長290309-10-1

平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料
2017 年 3 月 2 日
明星教育センター

学長 大橋 有弘 殿

授業実施報告書「キャリアデザイン1」(平成 28 年度後期)

「キャリアデザイン1」担当学部長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

Summary (概要)

- 本年度の「キャリアデザイン1」は、1 クラス開講し履修者は 67 名であった(金次郎者除く)。平均出席率は 75.2%、第 10 回～第 15 回までは 70%以上を維持した。単位修得者 77.6% (52 名)であったが、単位履修者 87.5% (32 名)に対して、その他の学科は 68.5%であった。
- 終了アンケートによると、授業の到達目標達成について、意識の醸成、キャリアデザインに関する知識・方法の獲得は 90%以上の学生が、学習内容の日常生活での活用は 82%の学生が肯定的に回答した。学生の授業満足度は高く、98%の学生が、授業に期待していたことが達成され、この授業を後輩に推薦したいと答えた。
- 全体として、学生たちは多様なメンバとグループワークを重ねながら学び、「働くことに対する肯定的な見方」「自分の将来への期待」「これからの就職活動や大学生生活を頑張ろうという気持ち」を獲得することができた。
- 今年度への課題として、①学習内容の日常生活への活用の促進、②意欲の差のある学生同士のグループワーク実施の工夫、③事前学習(自宅学習)の強化、④履修人数(クラスサイズ)への対応が挙げられる。

1 授業概要

- 1.1 教育目標
 - (1) キャリアデザインの理論学習に基づき、キャリアの考え方を知る
 - (2) 個人ワーク、グループワークを行い、自身の動労観・職業観を育成する
 - (3) 社会に出て働くことの様々な側面について知る
- 1.2 行動目標・到達目標
 - (1) 卒業後に社会人として活躍していくために必要な意識が醸成される
 - (2) キャリアに関する知識や理論を学び、自身のキャリアを考える方法を身につく
 - (3) キャリアについての考え方を、他者に説明できる

1.3 授業内容 (前年度からの変更点)

- (1) 15 回の授業を再構成し、新たに「第 2 回さまざまな働き方」「第 12 回自分の働き方を考える」を加え、「自身のキャリアを考える」授業内容を強化した。
- (2) 2015 年度の履修者数が 30 人だったのに対して、4 月末時点での履修者数は 91 人となった。そのため授業の構成(ルーティン)、ワークシート、座席指定等の方法を工夫した。また履修者数が増えたことにより多様性が増すことを活かした授業内容を検討した。

2 実施結果

- 2.1 開講曜日・時限・設置クラス等

2016 年度も 1 クラス開講(後期金曜 3 限)、2 名の教員による分担で実施した。また履修人数の増加に対応するため、SA(3 年生)を配置した。

平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料

2.2 履修者数
後期の履修訂正期間を経て、履修者数は 77 名となった。詳細は以下表 1 の通り。
履修者 77 名中、15 回全出席者を除いた履修者数は 67 名である。
本授業は、「1 年次、2 年次の履修を推奨する」(「社会的・職業的自立促進進目録」)についての第 2 次答申(平成 27 年 2 月 12 日)科目であるが、今年度の学年別履修者は、1 年 26 名、2 年 15 名、3 年 20 名、4 年 6 名であった。
また自由科目であるが、国際コミュニケーション学科は、科目の読み替えを行っているため、卒業単位に設定される。国際コミュニケーション学科の履修者は、全体の半数近く(67 名中 32 名)を占めている。

(表 1 履修者の詳細)

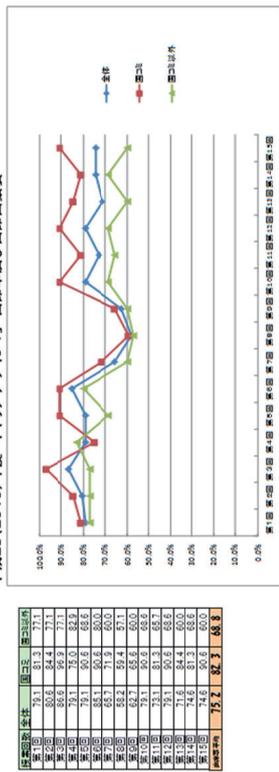
学部学科	1 年	2 年	3 年	4 年	合計
理工	4(1)	1			5(1)
国際コミュニケーション		6	21(1)	6	33(1)
人		1			1
文	1(1)	8	21	6	37
心理	1	1	(1)		2
情報		1(1)			1(1)
経済	13(5)				13(5)
経営	11(1)	5			16(1)
デザイン	4	1			5
合計	34(8)	16(1)	21(1)	6	77(10)

※ () 内の数字は、15 回全出席者 10 名(うち 2 名は期中除籍者)に当た人数。

2.3 出席率

平均出席率は 75.2% (2015 年度 77.7%)、最高は 86.6% (第 3 回)、最低は 58.2% (第 8 回)であった。出席率の詳細は図 1 参照。第 7 回 8 回 9 回が低下しているが、第 10 回以降は 70%を切るものがなく、最後まで一定の出席率を保っている点が注目される。
単位読み替えのある国際コミュニケーション学科のみの出席率は 82.3%、それ以外の学科は 68.8%であった。いずれも第 10 回以降は出席率の変動が少なく、第 10 回くらいまで出席し続けた学生は、単位読み替えがあるかどうかには関わらず、その後も継続して出席し続けている様子が見られる。

図 1 出席率



平成28(2016)年度「キャリアデザイン1」出席者及び出席回数表

学年	出席者数	出席回数	出席率
1 年	26	15	75.2%
2 年	15	15	86.6%
3 年	20	15	75.0%
4 年	6	15	40.0%
合計	67	60	70.0%

※ 履修者数の異なる履修者数(10 名)を基準として、出席率を算出しています。
※ 国際コミュニケーション学科 15 名、国際コミュニケーション学科以外 52 名を基準としています。

平成29年3月9日 学部長会資料

(2) 授業に対する取り組み

Q3「この授業にどのような取り組みましたか」は「非常に積極的に取り組めた」「積極的に取り組めた」が63%であり、「周りにいい影響を与えたかった」「周りの意見を考えることができた」というコメントがあった。「まあまあ積極的に取り組めた」(37%)に回答した学生の自由記述を見ると「自分から話せなかった」「積極的に自分から動けなかったが、授業自体にはよく取り組めたと思うから」という記述があり、もっと積極的に取り組むたかったという意欲が感じられた。「あまり積極的に取り組めなかった」は0%であった。この授業に関しては、自分から積極的に話し周囲に影響を与える授業だという理解ができてきているようにある。

「用語を覚えるのが大変だった」「最後まで集中が続かないことがあった」「グループのメンバーがやる気がないと(自分も)やる気が下がった」という自由記述は、来年度に向けての改善に役立てたい。

(3) 授業内容・進め方について

Q9「授業内容」(各回の授業テーマ・授業内で取り上げた理論の内容や量・教材)は98%、Q11「授業の進め方」(各回の授業構成・グループワークの内容・時間配分等)は94%が、肯定的に回答した。

Q10「良かった授業回(複数回答)」では、「第8回モチベーション」「第9回働く上でのストレス」を50%以上の学生が選択した。次いで「第6回意思決定」「第2回さまざまな働き方」「第12回自分の働き方を考える」「第15回今後の計画を立てる」「第4回パーソナリティ」と続き、これらは30%以上の学生が選択している。

Q12「授業の進め方」は、「アイスブレイク」「グループワーク」が良かったという回答が多く、次いで「講義」「個人ワーク」となった。

Q14「講義と演習のパラメータ」は「今のままで良い」が82%、Q13「クラスの人数(クラスサイズ)」は「ちょうどよい」が69%だった。

授業内容、進め方ともに、履修した学生の評価を得ることができたと言えることから、基本的な構造は、来年度も同様で良いと考えられる。

3.3 教員から見た授業評価

(1) クラスの多様性の効果

今年度は、履修者数が増えたこと、1年生から4年生までが履修したことにより、2015年度に比較してクラス内の多様性が高まった。授業内で多様な意見にふれることの効果を考え、あえて少人数クラスを作らず50人から70人程度のクラスサイズで授業を実施した。毎回異なるメンバーでグループを編成し、発表により多様な意見を知る機会をつくったことで、「さまざまなメンバーでのワーク」に対する学生の評価は高かった。学生が新しい出会いを楽しんでいる様子が見られた。

(2) 15回全体としての勤労観・職業観の形成

初年度の実施を受けて、授業の順番を変更し学生の学びを促進することを旨とした。第2回、第12回に授業での学びと自分の働き方をつなぐ授業を新規に設置し、第15回の授業では全体のもとめとなるワークを実施した。また2回のレポート(第7回・第14回提出)で、学習内容を自身の経験に当てはめて考えてくれる課題を課した。

毎回授業で記述させたアクシオニシートの記述を見ると、学生たちが「働くことに対する肯定的な見方」を獲得し、「自分の将来への期待」を形成し、「これからの就職活動や大学生生活を頑張ろうという気持ち」を持っているようになっている様子が見られた。15回の授業全体を通して、学習を積み重ねていくことができたのではと考えている。

3.4 その他

- (1) クラスサイズへの対応
70人のクラスサイズでも、アクティブラーニングを実践していくために、さまざまな工夫を取

平成29年3月9日 学部長会資料

2.4 単位修得率

単位修得者は52名で、全欠席者を除く単位修得率は77.6%(2015年度84.6%)であった。

国際コミュニケーション学科の合格率は87.5%(32名中28名)、その他の学科は68.5%(35名中24名)となり、単位読み替えのある学科とそれ以外では19ポイントの差があった。今年度はレポート提出を1回から2回に増やしたこともあり、学生が単位修得に対して意欲を持っているかどうかにより単位修得率に違いが出たことも考えられる。

※参考までに、不合格者は、国コミ3年2名、2年2名、日文2年1名、心理2年1名、経営2年3名、1年4名、経済1年2名であった。

3 授業評価

第15回授業内で、今後の授業改善のための終了時アンケート(記名式)を実施した。回答者は49名(2015年度20名)であった。アンケートをもとに学生による授業評価を見ていく。

3.1 教育目標の達成

行動目標・到達目標に関して、達成度を4件法で尋ねた。

Q5「キャリアに関する知識や理論を知り、自分のキャリアを考える方法が身についた」に「4:十分に達成された」「3:割と達成された」と肯定的に答えた割合は94%(2015年度90%)であった。同様に肯定的な回答はQ6「社会に出て働くことの特徴的な側面について理解し、卒業後に社会人として活躍するために必要な意識を育成することができた」96%(2015年度90%)、Q7「授業で学んだ知識を他者に説明したり、日常生活で活用できるようになった」82%(2015年度70%)となった。

キャリアデザインに関する知識と方法の獲得、意識の変化に比較して日常生活での活用についてのスコアが低い点は昨年と同様だが、その差は縮まった。昨年度は、毎回の授業で「学習内容をどのように日常生活で活用できたかを報告する」宿題を課していたが、形骸化するという弊害があったため今年度は実施していなかった。それにも関わらず「活用できるようになった」という回答が増えた理由として、①上級生の存在、②理解度の高まりが上げられる。昨年はすべて1年次の履修者だったが、今年は就職活動や部活動などの経験と授業内の学習を結び付けて語ることで上級生と共にグループワークを行うことで、様々な考えを知ることができた。前回の授業のリアクションシートの抜粋を毎回配付したが、その中でも様々な「活用の例」を紹介することができた。また昨年に比べて授業内のワークの数を絞ったことで1つ1つの項目に関する理解度が上がった。こういった点が「使える知識」となった理由と考えられる。

その他、Q8「学んだこと、身についたこと、身についたこと」には、「自分が何が苦手でも何が得意か」「自分が何を大切にしているか」「自分がどうしていききたいか」等の自己理解の深まりに関する記述が多く、「自分とちやんと付き合えそうだと思う」という意見もあった。

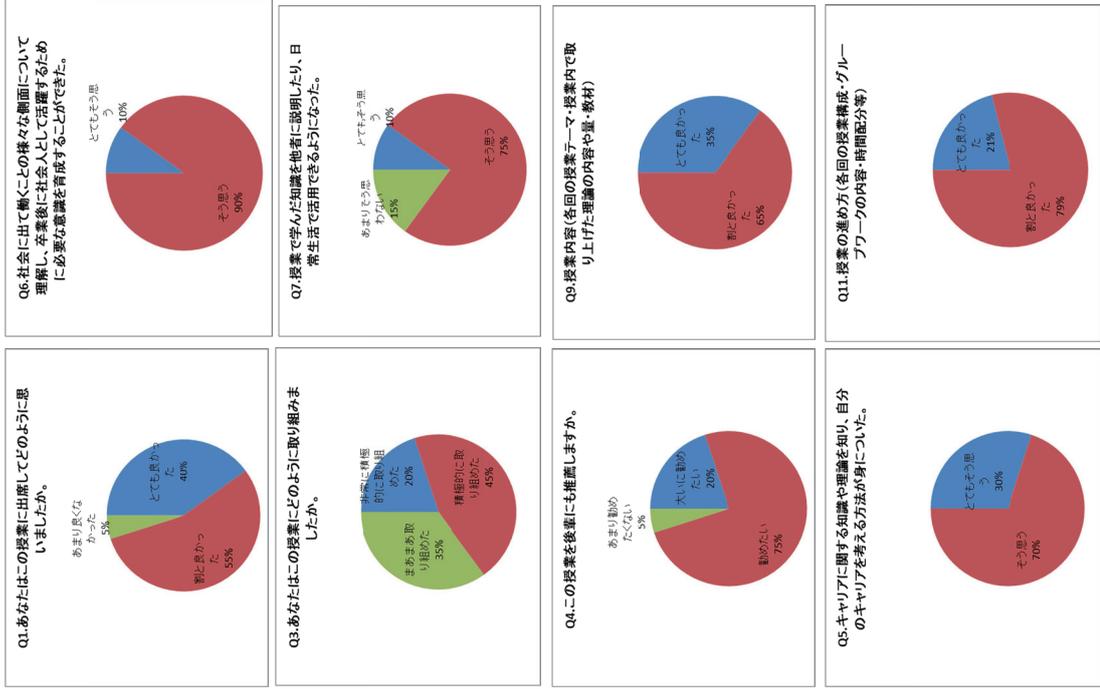
3.2 学生の満足感・反響

(1) 学生の受講満足感

Q1「この授業に出席して、どのように思いましたか」、Q4「この授業を履修しても推薦しませんでした」には98%が肯定的に回答し、授業に対する満足度は非常に高かった。また、Q2「この授業を履修して良かった点はどのようなことですか」(複数回答)を見ると、「授業内容が将来の役に立つと思った」を67.3%の学生が選択している。「授業内容が面白かった」「色々なスキルが身についた」は約40%、「グループ活動」「学部学科混成」という授業形態は約30%が選択した。

後輩に推薦する理由の自由記述も、「単位が取りやすい」は2名のみで、「授業内容が役立つ」「勉強になる」「色々な人と話せる」等の具体的な理由が殆どだった。

資料1
終了時アンケート結果詳細



り入れた。配布資料に番号を入れ毎回異なるメンバーでグループを組んだ。教員のサポートがなくても個人ワーク・グループワークが実施できるよう、ワークシートの改良、ワークの進め方の改良を行った。毎回の授業で取り扱う情報を整理し、時間的な余裕が持てるように配慮した。

(2) 授業ルーティンの工夫
開始時のアイスブレイク、個人シート記入後のグループワーク、終了時のアクションシートの記入・提出などをルーティン化し、学生にも示して、学生が主体的に授業に関わる仕組みを作った。
毎回のリアクションシートでは、その回の授業での学びを概念化し、自分に当てはめて考えられるようなテーマを課した。例えば、第2回「さまざまな働き方」では、「今日の授業を振り返り、次の点にふれて、自分の考えを200字以上300字以内にまとめなさい。」
①働くことのイメージ、②自分にとっての働くこと」であった。さらに、毎回の学生の参考になるリアクションシートの記述を6人程度選び、シートにまとめて配付した。他の学生の考え方を知る機会を増やすことができた。

このように、授業の進め方をルーティン化し、学びを授業内で完結させたことで、学生にとっての分かりやすさが増した。このことも、活用の実感が上がった理由の1つではと考える。

4 次年度に向けての課題

4.1 学習内容の日常生活での活用の促進

キャリアデザインに関する知識と方法の獲得、意識の変化に比較して、学習した内容の日常生活での活用の実感は低かった。どのように活用できるのかわかることも、実際に活用できるきっかけとなると考える。授業内でのワークを工夫するとともに、先輩(授業08)の活用も考えたい。またアンケートで「良かった」と学生が答えた比率が少なかった授業については、内容及び実施回の変更などを検討したい。

昨年度は、学習内容を日常生活でどのように活用できたかについて自分の意見を書いてくるといふ宿題を出し、事前学習の仕組みを作っていたが、形骸化してしまっただけで、今年度は実施しなかった。運用方法を工夫して、事前学習を有効に活用していくことは必要だと考える。例えば、授業内で、自宅で作成してきたレポートを用いて話し合う等の運動を検討したい。

4.2 意欲の差のある学生同士のグループワーク

グループワークを行う上で、積極的に参加しようという学生と参加意欲の低い学生とがグループ内いると、スムーズにワークが進められない状況があった。グループ内の司会役を決めたりワークを細分化して時間を短くする等の授業の構造化や、友人同士が同じグループにならないようにする席の工夫により改善を考えたい。

4.3 人数(クラスサイズ)への対応

今年度のクラスサイズは学生にとっても有効であった。基本は「多様性を活かす」という意味で次年度以降も同様の進め方を考えている。

一方アンケート(Q13)を見ると、クラスの人数が多いと答えた学生は8%、やや多いは28%いた。また、グループワークの質を高めるために教員が介入したり、グループ内での話し合いをクラス全体で検討することにより、学生がより深く思考できる可能性も考えられる。来年度の履修者数により方法が異なるが、多様性を活かしながら、授業をスムーズに進め、学習効果を高めるための工夫も考えていきたい。

添付資料：1. 終了時アンケート結果詳細
2. 授業実施内容一覧

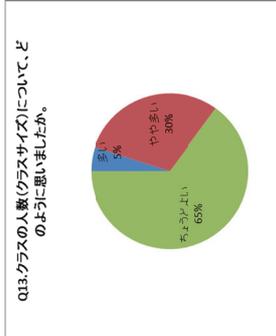
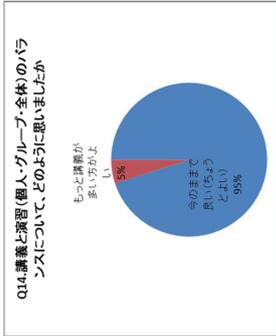
以上

資料 2

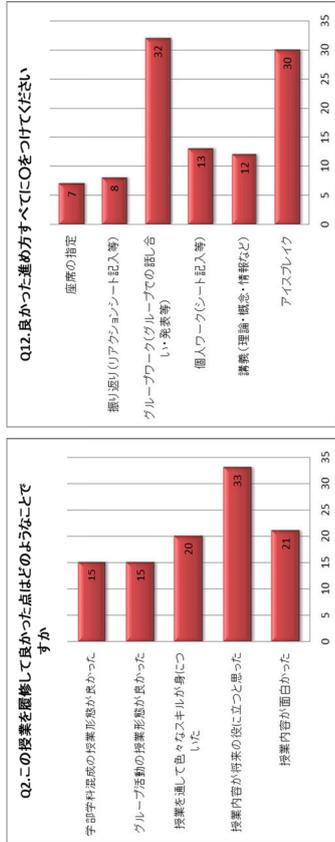
2016 年度「キャリアデザイン 1」授業実施結果 (内容)

回	月日	担当	授業名	主な内容(ワーク)
1	9/16	鈴木	オリエンテーション	・頭の中をアクティブにして学ぶ ・「キャリア」が付く言葉を考える ・「キャリアデザイン」を定義する
2	9/23	鈴木	さまざまな働き方	・「仕事」「働くこと」からイメージすること ・目的から見る仕事の3つの側面 ・労働(職業)価値観尺度
3	9/30	高橋	人の生涯に関わる発遣	・人の一生における発遣を考える ・大入学後の私の変化
4	10/7	鈴木	パーソナリティ	・エゴグラムによる自分理解 ・パーソナリティの特徴をつかむ(長所と短所・短所のリフレーミング)
5	10/14	鈴木	コンピテンシー	・自分のなりた職業に特徴的な「できる人」の条件 ・雇用能力をセルフチェックする(社会人基礎力【明星大学 Ver.1】)
6	10/21	高橋	意思決定	・私の意思決定プロセスの分析 ・ケーススタディ:進路選択に悩む友人へのアドバイス
7	11/4	高橋	ライフステージとキャリア	・身近な大人の人生の役割を考える(ライフキャリアレポート) ・あなたの人生の役割を考える(現在から将来へ)
8	11/11	高橋	モチベーション	・モチベーションの高い人の行動や考え方 ・モチベーションのものを探そう(モチベーションをあげるためにできること)
9	11/18	鈴木(高橋)	働く上でのストレス	・あなたのストレス対処方略(コーチング)を知ろう ・あなたのサポーターを知ろう ・私のストレス分析シート
10	11/25	高橋	キャリアをデザインする	・過去の経歴を振り返る ・今の自分を見つめなおす ・大きな夢(キャリアの方向性)を描く
11	12/2	高橋	働く若者を取り巻く社会環境	・データの見方(練習) ・データから考える
12	12/9	鈴木	自分の働き方を考える	・働き方に関する考えやその変化を探る ・社会の理察を知る ・自分の考えを表現する
13	12/16	鈴木	ダイバーシティ	・ダイバーシティの考え方を知る ・考え方の多様性を体験する(「はたからカード」演習)
14	1/20	鈴木	アサーション	・アサーティブな表現とは ・アサーションに影響する考え方のケース ・アサーティブな伝え方(私メッセージ)
15	1/27	鈴木	今後の計画を立てる	・「私のキャリアデザイン」を表現するコペア共有 ・これからの計画を立てる

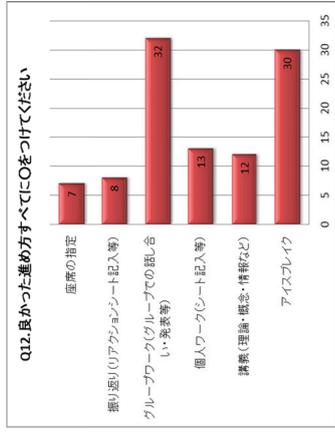
Q13. クラスの人数(クラスサイズ)について、どのように思いましたか。



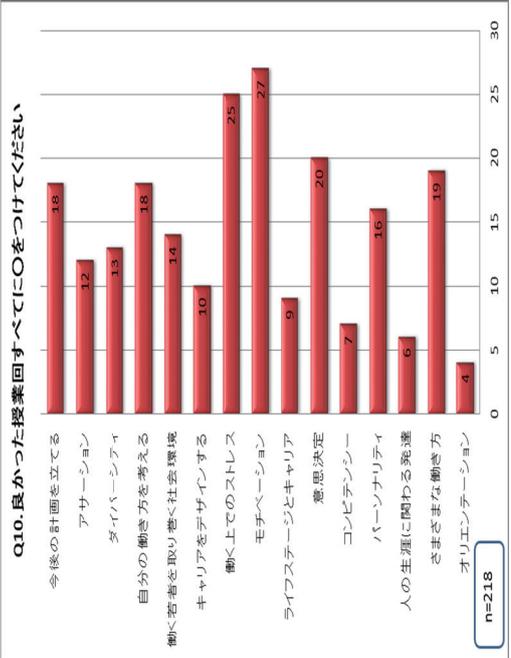
Q2. この授業を履修して良かった点はどのような点ですか



Q12. 良かった進め方すべてに○をつけてください



Q10. 良かった授業回すべてに○をつけてください



平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料
2017 年 3 月 2 日

学長 大橋 有弘 殿

授業実施報告書「キャリアデザイン 2」(平成 28 年度後期)

「キャリアデザイン 2」担当副学長 高島 秀樹
明星教育センター長 菊地 滋夫

Summary (概要)

- ・受講学生は登録 15 名に対して、実際に授業に出席してきたのは 13 名、単位取得数は 9 名であった。(全欠席者を除くと出席率 70%)
- ・授業内容については、シラバス通り弁護士、社会保険労務士、ファイナンシャルプランナーによる講義とその内容に関わる課題を学生に課し、ブレゼンテーションするという形で進めた。
- ・学生たちは、それぞれのテーマに関心をもち、学習したようである。ただ、授業に対する姿勢には学生間でばらつきがあり、全体的には学生が主体的に授業を進めるには至らなかった。
- ・次年度の課題としては、各外部講師とのより密接な意見交換が必要である。

1. 授業概要

(1) 教育目標

- 1) 社会で直面する問題についてのケースワークを行い、現実的態度を身につける
- 2) チーム活動で多様な考えにふれ、勤労観、職業観を育成する
- 3) 社会に出て働く上で必要な基礎的知識を学ぶ

(2) 行動目標・到達目標

- 1) 職業に就いて働いていくために必要な職業労働に関する種々の基礎的知識を習得する
- 2) 各テーマについて、チームで自律的に学習することにより、主体性、当事者意識、現実的能力を身につける

2. 実施結果

(1) 開講曜日・時間

後期間講科目：金曜日 2 時限

(2) 受講学生

登録学生数は別添資料 1 の通りである。この授業については、卒業要件単位に振替等をしている学科は現時点ではない。自由科目であるため、受講学生の増加、より広い学科からの受講が課題となっている。

(3) 出席欠席および単位の取得について

履修登録 15 名に対して、全出席は 4 名、欠席 1~4 回は 5 名、欠席 8~14 回が 5 名、全欠席が 1 名であった。全欠席者を除いた場合は、70%の出席率であった。(別添資料 2)
単位取得した学生は、15 名の登録者中 9 名 (60%) であった。全欠席者を除いた場合は約 64%であった。

平成 29 年 3 月 9 日 学部長会資料

(4) 外部講師

- 1) 仕事に関わる法律 (3 回~6 回) 平尾嘉昭先生 (弁護士)
- 2) 労働問題 (7 回~10 回) 石井清香先生 (社会保険労務士)
- 3) 人生に関わるお金 (11 回~14 回) 高島 健先生 (ファイナンシャルプランナー)

3. 授業評価

(1) 授業内容

1) カリキュラム

シラバスは、別添資料 3 の通りである。

2) 授業状況

授業はカリキュラムの通りすすめ、以下は授業回の進め方である。3 名からの外部講師から専門的な説明内容が①~③である。

第 1 回・第 2 回

第 3 回以降の授業準備として、授業内容の理解、チーム活動を進める上でのスキル獲得のグループワーク・個人ワークを実施した。

第 1 回では、外部講師 3 名が出席した授業内容に関する「〇×クイズ」を実施し、学生が授業内容を理解し、興味関心を持って第 3 回以降の授業に取り組みるように配慮した。

第 2 回では、チーム活動のスキル獲得を意図して、課題に関してインターネットで情報を集めブレゼンテーションを行うというグループワークを実施した。この授業単体としては意味があったが、第 3 回以降のグループワークとやや内容が重ならなくなった点があった。新規開講科目であり、授業内容を改善しながら進めたためであるが、より実践的内容にしておくことが今後の課題である。

第 3 回~第 14 回

3 つのテーマを取り上げ、テーマごとに 4 回の授業を行った。「チームでの事前学習」では、第 1 回に実施した「〇×クイズ」やテーマについての基本的なキーワードについて、学生がインターネットを利用して調べ回答を作成した。「専門家から学ぶ」で外部講師からの講義を実施し、「学習内容の整理」では、外部講師から出題された課題について情報を集め回答を検討し、ブレゼンテーションの準備を行った。「ブレゼンテーション」では、外部講師の前でブレゼンテーションを実施した。

第 15 回

これまでの学習内容をまとめ、レポートを作成させた。

①働くに関する法律 (第 8 回~第 6 回)

社会問題にもなっている「ブラックアルバイト」を導入トピックとし、講義内容が組み立てられた。この問題は、実際にアルバイトをしている学生とも関心が高く、講義においても関心を持っていったようである (注 1)。事前学習も活発であり、出された課題も学生アルバイトのケースワークであった。ただ、課題については、学生に対応を考えさせるといふよりは正解を出すものとなった。次年度以降、課題については再検討する必要がある。学生の発表は、第 1 回目のブレゼンテーションというだけでなく、形式的であったが、課題に対しては、ほぼ内容に込めるものとなっていた。

(注 1) 学生のレポートより「最初のテーマがブラックバイトという私にも身近な内容だったので、関心を持って問題を考えることができた」、「労働基準法について学んだが、これから先、社会人になる私たちはもっと法律を知るべきだと思った。」

②労働問題（第 7 回～第 10 回）

事前学習の〇×クイズに対する問題の解説作成と講師から与えられた要点項目の調査を PC やスママートフォンを使用し授業が進められた。外部講師の講義内容について、取り扱う範囲が広範となり、内容的にやや抽象的な講義になってしまった（注 2）。次年度以降は、扱う項目を絞り込みながら、より具体的なケースに基づき講義内容を組み立ててもらおうようこちらから伝える必要がある。しかし、学生のプレゼンテーションは、学んだ内容が幅広くあったためか、学んだ知識を生かし、課題に対応した発表を行っていたが、考えを深めるという点については、やや消化不良な部分となってしまった。

(注 2) 同「労働問題の語は・・・長い、難しい単語をスラスラ並べ、読むだけ・・・」、「今回の授業を受け、・・・実際に働くのはもう少し先お話であるが、自分を守るためにも社会に出る前に少しも知っておくべき内容であったと強く感じた。」

③人生に掛かるお金（第 11 回～第 14 回）

事前学習では、〇×クイズと外部講師から課題を出された金融専門用語の調べ学習を実施した。外部講師の講義内容は、現状の経済状況の中で、具体的に人が生活をしていく中でどのようなお金が必要か、この時代を生き抜くためにどのようにお金を使い、資産を作るかというところでもリアルな内容であった。労働問題と同様、盛り沢山の講義内容ではあったが、具体的であったためか、学生のプレゼンテーションでは、とても充実した内容のあった発表がなされた。プレゼンテーションの 3 回の積み重ねと今回の講義内容への関心の高さが窺えた。

(注 3) 同「先生の語は私たちの実生活にも関わることも盛り込まれており、人生の中でお金がどれほど大切なものか、そしておのおのお金の計画を立てることで不安というものが減り、心の余裕が生まれ、豊かな人生にもつながることであることを教えてくれた」、「では、お金が多くあれば必ずしあわせになれるか。答えは否である。実際、一世帯当たりの年収による幸福とは年収が上がることになるが 1000 万円をこえたあたりから急激に落ちるというデータがある。しあわせの形は一人一人異なるのだ。」

4. 学生の振り返り

授業の最後に、キャリアデザイン 2 の授業を受けて学んだこと、考えたことについてレポート課題を課した。そのレポートを読んで学生にとってこの授業がどういったものだったのかわかることができた。以下レポート課題より抜粋する。

- 1) 自分たちの生活の裏側でその生活を支えたり、自分たちを守ってくれる法律があることの認識を持った。
- 2) 就職を考えるときに、単に何がしたいかというだけでなく、就労のための規約や労働条件、社内規則などきちんと見ていく必要があるという認識を持った。
- 3) 人生でお金が必要だったことはわかってはいたが、より具体的に自分の人生に照らしてお金について考えるきっかけを持った。
- 4) 豊かな人生を送るために資産を築く必要性を認識した。

5) プレゼンテーションのスキルが上がった。グループ討論のスキルが上がった。
個別に学生を見たり、授業の流れを見渡したときに、学生内での授業への意識に大きな格差を感じたが、レポートを見る限りでは一定の学びや意識の変化があったようである。

5. 総評

新規開講科目の授業内容を検討していた際に考えていた授業の完成形からは、まだほど遠いかもしれない。しかし学生のレポートを読んだ上では、まずは順調に滑り出したと考えている。それは、①グループ活動を通してコミュニケーション力やプレゼンテーションのスキルを高めること、②生きていく上での、仕事に関する法律や制度、会社との関係、人生におけるお金とこういうことへの関心と知識を高めることであったからである。

新規開講科目であり、外部講師との情報共有をはかりつつも、授業全体の流れと各回の授業内容が噛み合わない部分もあった。しかし、実際は 3 名の外部講師の講義は 90 分でも足らなくなるほどであった。講義内容を絞り切れなかったために、外部講師が伝えたい内容が盛りだくさんとなり、情報過多となってしまったためと考えられる。

次年度以降、今年度の授業内容を基本的に踏襲した上で改善を図り、より内容を明確にし、学生たちの積極的な授業参加を期待できる授業を行なえるように外部講師との連携を図りたい。

6. 次年度に向けての課題

上記の報告を踏まえながら、次年度に向けての課題に取り組み、次年度へつなげていきたい。

- 1) 個々の外部講師との打合せを密にし、こちらの意図を明確に伝えていく。
具体的には、①講義内容をもう少し絞り、過度なコンテンツ導入を防ぐ、②より具体的な内容を加味した上で講義内容の構成してもらう、③課題内容については、きちんと討議して決めていく。
- 2) 学生が、主体的に授業を取り組む姿勢を身につける内容構成を検討する。
具体的には、①プレゼンテーションでの進行役を学生に任せる、②プレゼンテーションへの準備など、学生自ら進める度合いを増やす等。
- 3) プレゼンテーションに向けて準備する時間を増やした授業構成とする。
- 4) 途中に脱落者減少を防ぐために、オリエンテーションでの授業説明に工夫を加える。特に、2016 年度の内容を具体的に伝えられるように検討する。
- 5) 受講できる学年の幅をひろげられるよう PR 活動も検討する。

以上

添付資料：授業内容一覧等
資料 1：受講学生の学科別人数表
資料 2：出席率
資料 3：シラバス

資料 3 シラバス

時間コード	110500	科目区分	社会的・職業的自立促進科																																
科目名	キャリアデザイン2	科目区分	社会的・職業的自立促進科																																
担当教員	榎本 達彦																																		
単位	2	必修・選択区分	自由																																
後修学期	後期	授業形態	講義																																
メールアドレス	meed@mei.ac.jp																																		
キーワード	授業科目の教育目標 1) 社会で直面する問題についてワークシートを用いて、現職の態度を身につける 2) 労働関連制度・法律 3) ケースワーク 4) 専門家から学ぶ 5) フレゼンション																																		
授業計画・概要	<table border="1"> <thead> <tr> <th>前学期</th> <th>後学期</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1 オリエンテーション(チームビルディング)</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>2 チーム活動の準備(授業内でのチーム活動の進め方)</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>3 チームでの事前学習(テーマ、働くに関する法律)</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>4 専門家から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>5 学習内容の整理</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>6 フレゼンテーション</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>7 チームでの事前学習(テーマ、労働問題)</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>8 専門家から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>9 学習内容の整理</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>10 フレゼンテーション</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>11 チームでの事前学習(テーマ、人権に掛かるお金)</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>12 専門家から学ぶ</td> </tr> <tr> <td>13</td> <td>13 学習内容の整理</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>14 フレゼンテーション</td> </tr> <tr> <td>15</td> <td>15 評とめ</td> </tr> </tbody> </table> それぞれのテーマに対応した、法制度、労働問題の専門家、フィナンシャルプランナー等をゲストスピーカーとして招き、実際の問題にふれ、考える。また、仕事に對した後に役立つ知識が身につく。 この授業では、授業内での学習のほか、情報収集、フレゼンテーションの準備など、授業外での学習も必要である。積極的に取り組むこと。 学生の行動目標・到達目標 1) 職業に就いて働くために必要な職業労働に関する種々の基礎的知識を習得する 2) 各テーマについて、チームで自律的に学習することにより、主体的、自主意識、現実的能力を身につける 評価の方法：総合評価 1) 出席は、学期に準ずるが、基本的に1名1回出席を原則とする 2) 毎回の授業内容を振り返ること、授業内容を深めるために指定図書や論文を読んだりレポートすることなどの課題は全て提出が単位認定の必要条件となる 3) 授業に主体的に参加すること ※この科目は「全」で判定されるのでGPA対象外 テキスト、教材、参考図書など 1) この授業では、配布した資料を履修するためにファイルを使用し、毎回参照して授業に参加すること 2) その都度指定図書・論文等を指示する その他、履修上の注意事項や学習上の助言など 授業においては、社会人としての行動規範や態度を実践的に養成する。従って、そのような行動や態度を持って授業に参加すること。例えば、時間概念では、出席、欠席、遅刻、課題の期限など厳しく評価する。			前学期	後学期	1	1 オリエンテーション(チームビルディング)	2	2 チーム活動の準備(授業内でのチーム活動の進め方)	3	3 チームでの事前学習(テーマ、働くに関する法律)	4	4 専門家から学ぶ	5	5 学習内容の整理	6	6 フレゼンテーション	7	7 チームでの事前学習(テーマ、労働問題)	8	8 専門家から学ぶ	9	9 学習内容の整理	10	10 フレゼンテーション	11	11 チームでの事前学習(テーマ、人権に掛かるお金)	12	12 専門家から学ぶ	13	13 学習内容の整理	14	14 フレゼンテーション	15	15 評とめ
前学期	後学期																																		
1	1 オリエンテーション(チームビルディング)																																		
2	2 チーム活動の準備(授業内でのチーム活動の進め方)																																		
3	3 チームでの事前学習(テーマ、働くに関する法律)																																		
4	4 専門家から学ぶ																																		
5	5 学習内容の整理																																		
6	6 フレゼンテーション																																		
7	7 チームでの事前学習(テーマ、労働問題)																																		
8	8 専門家から学ぶ																																		
9	9 学習内容の整理																																		
10	10 フレゼンテーション																																		
11	11 チームでの事前学習(テーマ、人権に掛かるお金)																																		
12	12 専門家から学ぶ																																		
13	13 学習内容の整理																																		
14	14 フレゼンテーション																																		
15	15 評とめ																																		

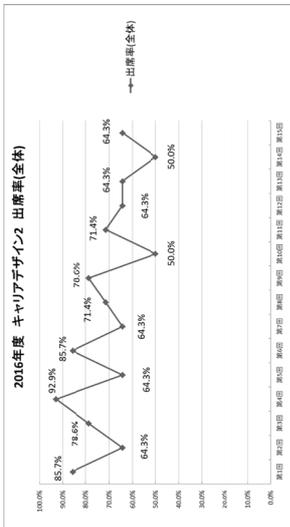
別添資料 1
受講学生の学科別人数表

理工学部総合理工学部建築学系	2 年生
理工学部総合理工学部環境・生態学系	2 名
人文学部国際コミュニケーション学科	2 名
人文学部日本文化学科	2 名
情報学部情報学科	2 名
経済学部経済学科	4 名
経営学部経営学科	1 名
計	15 名

別添資料 2

出席率(全欠席者1名除き14名)

授業回数	出席率(全体)
第1回	85.7
第2回	64.3
第3回	78.6
第4回	92.9
第5回	64.3
第6回	85.7
第7回	64.3
第8回	71.4
第9回	78.6
第10回	50.0
第11回	71.4
第12回	64.3
第13回	64.3
第14回	50.0
第15回	64.3
出席率平均	70.0



平成 28 年度 明星教育センター 自校教育事業報告
 一 明星資料展示室と明星教育センター自校教育講座一

1. 明星大学資料図書館 (15 号館) 明星資料展示室展示

【明星資料展示室概要】

明星資料展示室は、明星大学創立 50 周年記念事業の一つである明星大学資料図書館 (15 号館) の耐震工事に伴い、2014 (平成 26) 年に開設した明星大学の教育・歴史を紹介する展示室である。この展示室では、明星大学創立以来の歴史をテーマ別に紹介する常設展示、明星大学にゆかりのある人物・学生生活やキャンパスの移り変わりなどを紹介する企画展示 (年 1 回展示替え)、同フロア (資料図書館 2 階) にある明星貴重書室・明星ギャラリーとの共通テーマのもと、明星大学と明星大学図書館所蔵の貴重書との関係を紹介する企画展示 (年数回展示替え) の 3 つ展示スペースからなる。

平成 28 年度は、企画展示として「拡大期の明星大学」展や「学生の課外活動の歴史」展、明星大学図書館企画「明星大学貴重書コレクション展 教育の明星大学の教育」展の合同企画として「明星大学の教育」展を開催した。また、平成 29 年 4 月の心理学部心理学科新設に伴い、常設展示の一部がリニューアルされた。以下、平成 28 年度の資料図書館明星資料展示室の展示に関して、会期・展示内容 (テーマ) を報告する。

【明星資料展示室展示記録】

会期	内容 (テーマ)
平成 29 年 3 月 21 日～	<p>【展示内容】 常設展「明星大学の歴史」のリニューアル 心理学部心理学科新設について追加。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ごあいさつ ■ 明星大学の沿革 ■ 学部学科改組変遷図 ■ 学部・学科、大学院研究科・専攻の増設 ■ キャンパスの再開発
平成 26 年 10 月 29 日 ～平成 29 年 10 月下旬	<p>【展示内容】 企画展示「拡大期の明星大学」</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 拡大期の明星大学 1985 (昭和 60) 年～1997 (平成 9) 年 ■ ヨット「エコー号」太平洋航海(1985(昭和 60)年) ■ ヨット「エコー号」による教育活動(1986(昭和 61)年) ■ いわき明星大学の創立(1987(昭和 62)年) ■ 青梅キャンパスの開校(1992(平成 4)年)

平成 28 年 10 月 29 日 ～平成 29 年 3 月 18 日	<p>■ 明星学苑日食観測団チリおよびパラグアイでの観測(1984 昭和 59)年)</p> <p>【展示内容】 企画展示「学生の課外活動の歴史」</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 課外活動のはじまり ■ 課外活動の写真「モザイクアート」 ■ 明星大学 課外活動 映像 ■ 近年の学生の活躍
平成 29 年 3 月 21 日 ～平成 30 年 3 月上旬 (予定)	<p>企画展示「明星大学の教育」展</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「明星大学の教育」展開催にあたって ■ 受け継がれる「実践躬行の体験教育」 ■ 明星大学の教育 映像 ■ 創立者・初代学長 児玉九十先生の教育理念 ■ 「教育の明星大学」の源流—「人格接触による教育」の実践— ■ 第 2 代学長 児玉三夫先生の教育理念 ■ 明星大学貴重書コレクション—大学図書館の教育的価値—

【平成 28 年展示の様子】

企画展示「拡大期の明星大学」



2. 明星教育センター自校教育講座

明星教育センターは、明星教育に関する研究・啓発・広報活動並びに明星教育の具現化及び学生の社会的・職業的・自立促進等に関する教育研究活動を実施するために、自校教育事業でも明星教育センター自校教育講座を開催している。平成28年度は、「平成28年度第2回 全学FD 研修会」と共催し、以下、開講日時内容を報告する。

【講座内容】

開催日	概要
平成28年12月20日 13:30～15:00	<p>■テーマ：明星教育を語り合う一次世代に受け継ぐ明星大学の教育</p> <p>■内容：「明星大学の歴史を知り、大学に対する理解を深め、次世代に明星教育を受け継いでいく」ことを目的とし、大学の創設期から現在までの明星大学の教育を知る先生方と歴史を語り合うことで、今後の明星教育について考える。</p> <p>■講演会①：明星教育を語り合う一次世代に受け継ぐ明星大学の教育 講師：明星学苑 副理事長 小川 哲生氏</p> <p>■講演会②：明星大学の過去に学ぶ一職員・教員としての体験をふまえて—— 講師：明星大学 副学長 佐々井 利夫氏</p> <p>■座談会：講師：小川 哲生氏・佐々井 利夫氏 コーディネーター：明星教育センター長 菊地 滋夫氏</p> <p>■場所：明星大学28号館2階202会議室</p>

【講座の様子】



明星学苑 副理事長 小川 哲生氏の講演



明星大学 副学長 佐々井 利夫氏の講演

企画展「学生の課外活動の歴史」



企画展「明星大学の教育」展

